瓦版

1998-7-2

1

瓦版なまず　第1号
編集人　寺田　匡宏
発行人　季村　範江

震災・まちのアーカイブ
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4　神港金属㈱内　Tel 078-681-6231　Fax 078-681-6232

「長楽（ながら）第２避難所資料」についての報告

季村　範江

本庄町という小さな街が長田区にある。

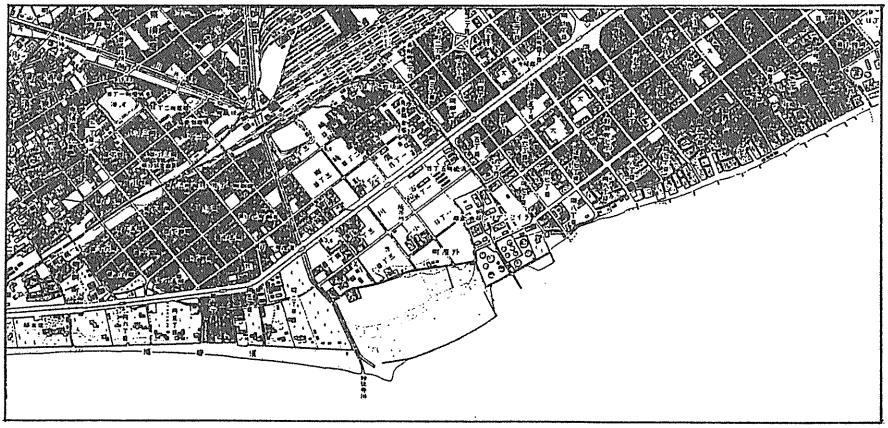
小さな街といっても、そこには、記憶と記憶を大切に育む人びとがひっそりと息づいている。

本庄町は須磨区との境目に在り、国道２号線の南側、密集する町工場と住宅が混在する地域である。南へ少し歩くと、すぐ海へ出られる。だが海といっても、西隣の須磨の海が『源氏物語』の舞台になったり、海水浴場として知られているのにひきかえ 動物検疫所や汚水処理場、ガスタンクなどが殺風景に立ち並んでいる。

森山千代江さん（50 歳）は、その本庄町５丁目で、ご主人と喫茶店を営んでいた。

地震で自宅兼店舗は全壊、付近は火災にこそ見舞われなかったが、戦後まもなく建築された古い木造家屋が密集していたため、被害は大きく、死者も少なくなかった。

当初森山さん一家は近くの長楽小学校に向かったが、もうそこは満員で中にも入れず、やむなく通りを隔てた私立野田高校の体育館を長楽第２避難所として使わせてもらうことになった。体育館だけに限定されたわけである。



戦前期1932年、本庄町付近のようす（『明治前期・昭和前期神戸都市地図』柏書房、1995年より）

同所体育館は、当時約600人くらいが押しよせていた。横になることも出来ない状態だったので、体育館をＡＢＣＤの４ブロックに分け、それぞれに班長を決め、お年寄りと子どもを中心に助け合って生活した。震災の翌日には、すでに自分たちで工夫し、暖かい食物を作り分けあったりもしていた。それだけ地域の絆が強かったといえると思う。ここでの暮らしは、避難所が閉鎖される7月25日まで続いた。

だが残念なことに、まる3年の歳月が過ぎた現在、日々の活動報告を記したノートは引っ越しや避難所閉鎖の混乱のさ中で行方不明、当時の様子は記憶の中だけになってしまった。現在残っているのは、避難所担当教師西畑康次氏（野田高校）が保管する個々の被災状況を記したカードや、その後の人びとの追跡資料、別の場所に移っていった人からの便りなどである。ほかには名簿がある。そこには半年間寝食をともにした人びとが避難所閉鎖の折、「花時計の会」という同窓会を作ったメンバーの名が記録されている。

森山さん一家は、長楽第2避難所、新長田勤労センターの待機所、須磨区の東白川台仮設住宅と移り住み、念願かない本庄町に自宅再建できるまで2年近くの歳月を要した。さらに、お店を再開は、それから8ヵ月先の夏の頃であった。

気さくで、面倒見のよい人柄（思えば、いわゆる下町に息づいてきた特徴のひとつでもあるのだが）の森山さんは、避難所では班長を、仮設住宅では自治会長を努めた。そして現在でも、日々喫茶店を切り盛りするかたわら、近隣のお年寄りの病院通いのお手伝いを黙々と続けている。一家と苦楽をともにした愛犬と2匹の猫が迎えてくれる店は、近所のお年寄りが気軽に集うネットワークの場であり、仕事帰りの疲れた人が一息つく憩いの場であり、震災で偶然出会った人びとの情報が至近距離で通いあう場でもあった。

西畑先生の資料は、このお店に引き継がれ、今しっかりと保管されている。

資料に書かれた文字、一人ひとりの名前。それらは、人びとが支える街の真ん中で、思う存分生きはじめている。

自ら被災しながら、寝食を忘れ、長楽第二避難所のために働いた西畑先生。長良小学校に入れず途方に暮れていた時、とっさの判断で野田高校の体育館の鍵を開け、中に入れてくれた用務員の永井さんご夫妻。600人の生活を、影になり日向になり守ってくれたこの方々の尽力に応えるためにも、お互い仲良く協力して暮らそうと努めた避難所の人びと。この資料は、震災の記憶を抱え、支えあう人びとのこの町で、この人びと自身の手で保存されるのが最もふさわしいのではないか。

用務員の永井さんは、無理が重なったためか、あんなに元気になったのに、半年前本当に突然亡くなられた。森山さんのお店再開を、誰より心待ちにして喜んでくれていた永井さん。亡くなる直前まで、お店に足を運んでいたという。永井さんの想いと思い出は、お店に立ち寄る人々の胸に深く刻まれ、この街の記憶とともに生きていく。　（震災・まちのアーカイブ会員）

「震災・まちのアーカイブ」では森山千代江さんの紹介で、私立野田高校教諭 西畑康次氏の震災一次資料を一時借用し、目録を作成しました。

目録の完成後、西畑氏に返却された資料は、同氏の震災一次資料を地域で保管してほしいという意向により、現在は森山さん経営の喫茶店「アール」で保管されています。

なお「西畑康次氏資料目録」は、「震災・まちのアーカイブ」で公開しています。

［レポート］

震災一次資料整理の現況

佐々木　和子

震災資料として収集されているものは、書籍、写真、ビデオ、ノート、チラシ、広報紙など実にさまざまである。その対象もまた、旧避難所、仮設住宅、ボランティア、まちづくり協議会など、多方面にわたっている。

現在、「震災・まちのアーカイブ」では、ボランティア団体などの文書資料を中心に整理をおこなっている。これらの資料は、震災・まちのアーカイブの前身である「震災・活動記録室」から引き継いだものが、ほとんどである。震災・活動記録室は、1995年5月に「やったことを記録に残すボランティア大集会」を開催するなど、ボランティアを中心とした記録収集活動をおこなっていた。そのため、ボランティア団体の初期の活動を示す、貴重な資料が多数含まれている。

整理をはじめてみると、いままでの資料整理と少し勝手が違うのに気づく。形態は、クリアファイルに入ったもの、穴あきファイルで綴られたもの、ホッチキス止めなどで、紐とじはほとんどみられない。とじ方が多彩で、冊子、綴りの区分をどこにおくか、あるいはこの区別が適当か迷うことがある。ワープロの文書には訂正のあとが残らないため、同じような内容のものは、日付がなければ、どちらが先に作られたものかわからない。コピーされた資料が多く、ファックス用紙など感熱紙に印刷されたものがあるのも特徴である。また、資料の一部に、蛍光ペン、マーカーで色塗りされたものがある。いずれも、3年半を経た現在では、すでに変色、退色がみられる。

整理は、仮目録をとることからはじめている。ファイルには、さまざまな種類の資料が含まれているが、1枚づつ目録化するのには時間がかかる。それより、資料の全容をつかむため、枝番の必要性を記しながら、仮目録をとることにした。このとき、ファックス用紙など感熱紙に印刷されたものは、コピーをとっている。

資料整理には、コピーが不可欠である。しかし、コピー用紙は、劣化のはやい再生紙がでまわっており、資料をコピーするときには注意が必要である。カラーコピーは、彩色された資料をきれいに復元してくれるが、変色、退色がおこりやすい。蛍光ペンやマーカーを使った文書はどのような方法で保存をおこなうのが適当かなど、新技術や素材の進歩と資料保存の関係はこれから検討していかなければならない課題である。　（震災・まちのアーカイブ会員）

コラム　罵詈山房主人独白

突如行方不明だったワールドカップサッカーの入場券が、日本の一次リーグ敗退が決まったジャマイカ戦の前、あっというまに姿をあらわした。やはりそうだったのかと私たちはつぶやいていたが、あとの祭りという奴、八つ当りさえできなかった。

マフィアまがいのダフ屋が横行したり、謝り通しの旅行代理店社員が電信柱をおもいきり蹴っ飛ばして毒づく光景まで画面に流れていた。小さな紙ぎれに思わぬ価値が生まれ、価値は新たな価値を生み、いわば闇の市場の一時的な王者に昇りつめたわけである。

探しまわっていた入場券が闇の中に隠れていたことと、私たちが今、探している震災一次資料との関係をふと考えてみた。あの「ことばの群れ」は、いったいどこに消えたのだろうか。多いのが、転居などのとき、もはや不要と処分され、荒ゴミにまみれ、灰になってしまったケース。その場合、すでに資料は世界から消滅している。闇という比喩では、もはや語れない場所に資料は移行してしまっている。資料には、価値がなかったのだろうか。資料を扱っていた、最後の人には価値を見いだせなかったからゴミと同類になったのだとおもうが、みんな仮りの宿り、引っ越しを急ぎ仕方なかった。

やあ元気でしたか、遅れましたがやっと戻ってきました。こんな資料の挨拶を私たちはもう聞くことができない。被災地にダフ屋はいるのだろうか。震災一次資料にとってのダフ屋の役割は誰が担うのか。私たちは電信柱を蹴りあげ、イタタタとこぼす代理屋なのか。ダフ屋でも旅行代理屋でもない、もちろん廃品回収屋でない道を私たちは考えているのだが。

（罵詈山房主人）

［シリーズ　私と記録／私と記憶］

一枚の絵から聞こえてきた声

――沖縄の旅から――

藤原　直子

昨年末、3度目の沖縄を訪れた。12月末だというのに、春のような暖かさで、その青い空と海は変わることなく私を迎えてくれた。

旅の初日、本島から西へ40キロ程離れた慶良間諸島のひとつ座間味島に渡った。海洋文化館に入ってみる。そこには、かつてこの島がかつお漁で栄えた頃沖縄の言葉で「いちゃりばちょうでぃ」逢えば誰も兄弟であるという心を持って、南洋まで行き交った人々の歴史を伝える資料が並んでいた。そして、この島のもう一つの歴史、沖縄戦を伝える資料もそこにはあった。1945年3月、沖縄上陸戦の第一歩として、慶良間諸島に米軍艦隊が入り、惨劇は始まっていった。その時の様子は、「島々をつなぐように艦隊が連なり、エメラルドの海は紅い血で染まった」とあった。浜辺まで出てみると、海は穏やかに東シナ海に広がっている。目の前の海が美しければ美しい程、思い浮かべられるその光景に胸が痛んだ。流された紅い血を思い、その魂の声に耳を傾けてみた。

旅の2日目、広島での体験を『原爆の図』として残された丸木位里さん・俊さんの描いた『沖縄戦の図』を見るため、宜野湾市にある佐喜眞美術館に出かけた。普天間基地のフェンス沿いにある美術館の敷地には亀甲墓があり、前庭には地元の高校生が、戦争で犠牲になった人々の数だけ積んだという石の小山があった。

館内に入り、歩を進めると、一番奥の展示室に圧倒的な力でこちらに迫ってくる絵が見えた。怖くて、その絵に近づくことができない。それが、『沖縄戦の図』だった。ゆっくり近づいて行く。縦4メートル、横8.5メートルに及ぶ画面の中で、日本軍に、米軍に追いつめられて逃げ場を失った人々がそこに彷徨い、洞の中

▲丸木位里・俊「沖縄戦の図」より

で親が子を、夫が妻の生命を絶ち、そして重なり合うようにして死者が眠っていた。人々の目には瞳がなく、魂を失ってしまったように悲しい目をしている。ただひとり、子供の目に瞳が描かれているのは、その子に希望を託したのであろうか。ひとつひとつの顔を追ううち、悲嘆の中にも人が人としてあることへの祈りが満ちている事に気付き、恐怖心は消え、心が安まっていった。そして、座間味島で耳を傾けた人々の声が聞こえ始めた。

『沖縄戦の図』は、丸木さんご夫妻が何度となく沖縄を訪れ、痛恨の場に立ち、資料を繰り、戦争を体験した人々の証言を聞くことによって、ひとつずつ形にされていったのだと知った。震災後、資料を収集し残すという活動に関わりながら、その資料が将来どのような形で結実していくのか私には見えなかった。しかし、沖縄で出逢った一枚の絵から、いつか再び死者が歴史を語り出す時、その手助けになり得ることを学んだ。今、私達の傍らにある資料のもつ可能性を実感することのできる貴重な沖縄の旅となった。　　（震災・まちのアーカイブ会員）

［民間アーカイブの系譜①］

「民間」から……

寺田　匡宏

「民間アーカイブの系譜」などということごとしい題名をつけたものの、明確な見通しがあるわけでもなければ、これまで研究を行ってきた蓄積があるわけでもない。単に、僕たちの行おうとしている震災一次資料保存活動を少し広い視野から眺めてみようと思いたち、こんなタイトルの文章を書き始めようとしている。民間とは何か、アーカイブとは何か、そして系譜とは。きちんと答えるべき問題、検討すべき事柄だらけである。そもそも「民間アーカイブ」という言葉自体、僕が勝手に作り上げた言葉であり、今のところ何の裏付けもない。

「民間」ということ。近代史家鹿野政直氏の著書『近代日本の民間学』から「民間学」という言葉を学んだ（岩波新書、1983年）。

> どうすれば人間が学問の主人公となりうるか、いいかえればふつうの市民が学問への自発性を喚起され持続し、それによって既存の学問を点検する気運を高め、さらに学問の新しい枠組への途をひらいてゆくかを考え、その意識を過去に投影させるとき、わたくしには「民間学」という範疇が浮んでくる。

民俗学の柳田国男、沖縄学の伊波普猷、歴史学の津田左右吉、生物学の南方熊楠、民芸の柳宗悦、被差別部落研究の喜田貞吉、女性史の高群逸枝……をとりあげるなかで、鹿野氏は民間学とは何かを考えてゆく。

この引用での、「学問」という言葉、これを「資料を残すこと」という言葉におきかえることはできないだろうか。人間が主人公となる資料保存とはどうすれば可能なのか。僕たちふつうの市民が資料を保存することの重要性に気づき、資料保存運動を始める。そのこと自体が、社会の点検作業でもあり、新たな社会を作り出す可能性を開く作業でもある……。資料保存を、僕たちの社会への向き合い方の一つの手段として考えたい、その鍵になるのが「民間」ということではないか、という予感がある。

ところで、民間学の逆とは何だろう。民間学と対比されるのが、国家による保護を受けた官学・アカデミズム。国家の手厚い保護の影響は、学問の方法や存在形態のみならず、学者の自己意識にまで及ぶ。

一方、民間学は、国家からの手厚い保護など望むべくもない。徒手空拳、圧倒的な貧しさ。アイヌ研究者金田一京助は、赤ん坊が病気になった時、火鉢に火の気なく子どもを死なせてしまったという。しかし、彼らはその制約の中で学問を完成させた。もう一度鹿野氏の言を引くと、「いかなる制度上の保証もなく、ただ熱い志だけがひとり歩きしていたのである」。

思えば、資料を残すこと、資料を後世に伝えることとも、「こころざし」あってはじめて可能な行為 血の通う営為ではなかったか。

震災一次資料の保存に取り組もうとする時、これまで様々な場所で、様々な人が担ってきた、様々な形の記憶や歴史の残し方が、少しずつ見えてきた。広島、水俣、ショアー（ホロコースト）、在日朝鮮人、沖縄……。国家の保護もなく、在野で、ただ熱い「こころざし」だけに支えられてきた資料群。

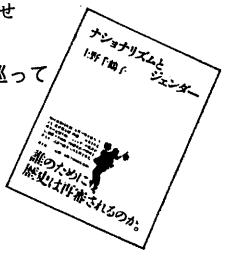
この資料の残し方、アーカイブのありようをとりあえず、ここでは「民間アーカイブ」と呼んでみる。その上で、「こころざし」の稜線をたどりたい。その作業を通じて僕たちの震災一次資料保存の活動を鍛えたい。

途中で道を見失うかもしれないけれども、歩きはじめなければ目の前の風景は変わらない。とりあえず第一歩を踏み出そうと思う。

（震災・まちのアーカイブ会員）

「震災・まちのアーカイブ」第2回研究会のおしらせ

従軍慰安婦問題が投げかけるもの
上野千鶴子著『ナショナリズムとジェンダー』を巡って



歴史とは何か。

私たち自身の歴史を、どうつくりあげるのか。とりわけ阪神大震災を体験したものにとり、この問いはなぜか切実なものがあるとおもいます。

出来事とは何か。

それは、誰が、誰に、どのように伝えていくのか。

勝利し、支配した側がつづる正史（official hisotory)。抑圧され、見棄てられた者の沈黙。この構図は被災地でもあきらかです。復興の歩みもまた、正史からこぼれ落ちる敗者を視野に入れて進まねばなりませんが、現状はどうでしょうか。ほとんどの発想は敗者の沈黙をくりこむことができていません。目に見える価値にしか興味がないかのような光景です。

「歴史の再審(historical revisionism)」上野千鶴子氏は新著『ナショナリズムとジェンダー』(青土社、1998年）の冒頭でこの言葉を用いています。

再び問われる。

では、問われているのは、問うているのは、いったい誰なのか。歴史は、いうまでもなく私たちが背負う過去ですが、それはまた現在でもある。一人ひとりの、今ここが、激しく、いくたびも問われる場所であります。出来事はそのように、生成するものとしてとらえられねばならない。上野千鶴子氏は、こう言っているようであります。

かつて「従軍慰安婦」を隠蔽したように、また「南京虐殺」を隠蔽した同じ発想の構造で、阪神大震災も大きく塗りかえられようとしているのではないか。そのことに私たち一人ひとりは、そのことに荷担しているのではないのか。

やっと出来上がった新しい復興住宅から、自ら死を選びとった友人の部屋で茫然と立ちすくみながら、私たちは追悼の言葉も言えず、ふるえつづけています。無念の死者は、どのように記憶され、記録されねばならぬのか。歴史は誰のものなのか。

上野氏の新しい仕事は、震災の記憶に鋭く迫ってくる力があります。日々被災地に生きる私たちは、彼女の問いに答えたいと思います。そんなわけで読書会を企画致しました。ふるってのご参加を心待ちにしております。

日時　1998年7月18日（土）　午後1時～5時
報告　季村敏夫
場所　「震災・まちのアーカイブ」 市営地下鉄「長田」神戸高速「新長田」下車、南へ徒歩7分
会費　無料
問合せ　季村 078-781-8891／寺田 0797-22-5288

【編集後記】『瓦版なまず』第1号をお届けします。先般発行の『なまずブックレット』では「被災地の記憶と記録の問題を考えたい」と大きなテーマを掲げました。瓦版では資料の整理を行いながら考えたことを、私たちなりの言葉で、少しづつ形にしてゆければと思っています ◆「資料を残すことが大切なことはわかる。しかしそれがなぜ大切なのか、どんな役に立つのか、そのことを教えてほしい」震災資料のみならず、資料を残そうとする時、必ず問いかけられる言葉です。震災から3年半、震災一次資料がどのように役に立つのか、どのように生きてくるのか、この問いに答える必要はますます高まっています。どのようにすれば可能なのか。活動の意義が問われるのだと思います。【寺】

1998-9-26

2

瓦版なまず

1998年 9月26日　初版
1998年11月 5日　第2版2刷

瓦版なまず　第2号
編集人：寺田　匡宏
発行人：季村　範江

震災・まちのアーカイブ
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4　神港金属(株)内　Tel;078-681-6231 Fax;078-681-6232 E-mail;kioku@kh.rim.or.jp

［報告］

フィールドワーク

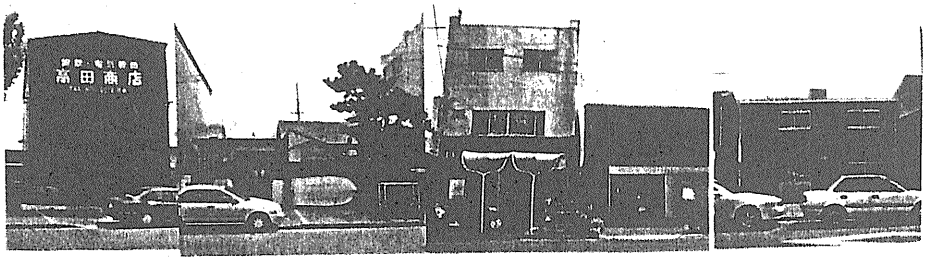
「検証・公費解体――つぶやきの震災精神史」について

寺田　匡宏

地震から4度目の夏が過ぎた。この夏から、私たち「震災・まちのアーカイブ」は、「検証・公費解体――つぶやきの震災精神史」と題したフィールドワークに取り組んでいる。公費解体の検証を、被災地での聞き取りを通じて行なおうという試みである。これまでに、いくつかの聞き取り、資料の収集などを行った。ここでは、これまでの経過を紹介するとともに、震災一次資料の保存に取り組む私たちが、なぜ公費解体の検証に取り組んでいるのか、改めて振り返ってみたい。

いうまでもなく、「公費解体」とは、震災で倒壊するなど大きな被害を受けた建物の解体撤去を、国・地方自治体の費用負担によって行った一連の制度のことを指す。被災地では、建物の撤去に悩む所有者にとって朗報であった一方、多くの居住可能な建物が、公費解体制度が存在することで解体された。

この公費解体の検証に、私たちはなぜ取り組もうと思ったのか。私たちは、震災一次資料の保存を通じて記録と記憶の問題を考えたいと思っている。記憶と記録の問題。その際、避けて通れないのが、震災で失われた記憶や記録である。あの時、壊れた建物を急いで解体撤去した。それはなぜか。雪崩をうったように公費解体に社会の雰囲気が流れた。被災



「震災・まちのアーカイブ」事務所前の町並み（神戸市長田区東尻池町、1998年9月）

地で私たちの心に何が起こっていたのか。災害という非常時は、その社会の真の姿を浮き彫りにする。記憶と記録の問題に関心を持つ者として、まだ手が着けられていない公費解体の検証作業に取り組まねばならないと思えたのである。

さらに考えてみれば、私たちが活動している場所そのものも、「公費解体」の検証を促している。神戸市長田区東尻池町。神港金属㈱のご厚意で私たち「アーカイブ」が使用させてもらっているプレハブは、同社本社が全壊した跡地に立っている。真新しいプレハブの下の過去の記憶。私たちはそのつぶやきを感じながら活動している。公費解体は、私たちが取り組まなければならないテーマであるとすら感じられるのである。

この夏のフィールドワークを前に、各自治体が発行した『復興誌』『震災の記録』で公費解体がどのように語られているのか調べてみた。多くがほぼ同じ書き方をしている。

たとえば、国による公費解体の方針決定と処理体制の確立、殺到した解体申請、解体撤去の実施方法、時期別の解体件数、ガレキの内容別の処理処分のフローチャート、ガレキ処理の進捗状況、野焼きの問題、粉塵・アスベスト対策。……

しかし、公費解体とはこの事実だけで語れるのだろうか。事実とは決して一つではない。色々な立場からの複数の現実があるはずだ。自治体の発行する『復興誌』といういわば「震災の正史」とは別の、「つぶやき」が明らかにするもう一つの震災の現実。一人ひとりの視点から、「つぶやき」から公費解体の功罪を検証する作業はこれまでまだ行われていない。

解体撤去した父の遺した会社社屋を思い続ける会社経営者。一旦は市に解体申請を提出したが、「待てよ」と取り下げ自力で修復した建築家。取り壊す前に自分の家は自分で片づけたいと、今もブルーシートの家に住む老婦人。居住可能なマンションを公費で解体することに異議を唱える少数者のグループ。……

大きな声ではない。けれど、空き地に、小道にさまざまなつぶやきがある。

「解体作業の日、自分の内蔵に白昼、手を入れられる感覚だった」「仕方がなかった。その夜、寝ようとしても涙があふれて眠れなかった」

公費解体をめぐるつぶやきから、その人にとっての震災、震災で揺さぶられた精神のありようが浮かび上がる。一人ひとりにとって震災とは何か。「復興」へ収斂する「震災の正史」ではない、もう一つの震災史を探ること。そして、それを通じて「震災精神史」への一つの試みを提示すること。「つぶやき」から公費解体の功罪を検証するこの作業は、私たちなりに震災の「再審」に取り組むことなのだと思う。

現在行っている作業はいくつかある。法制度も含めた仕組みに関する事実の確定。解体進捗状況の町名別件数データベースの作成とその分析。被災マンションの公費解体に関する聞き取り調査……。この検証作業について『神戸新聞』に掲載されたことで、あらたな「証言」「つぶやき」も寄せられている。

これらの過程は、同時に私たちの資料蒐集の過程でもある。資料を蓄積しながら、勉強会、フィールドワークに取り組む。来年はじめに報告書（ブックレット）を完成させたいと考えている。

（震災・まちのアーカイブ会員）

[報告]

ゼンカイの家

季村　範江

阪急宝塚南口駅から歩いて数分の所に、「ゼンカイの家」は建っている。

建築家宮本佳明氏の生家で、築後98年の齢を重ねている。北側を玄関にして、この家は四軒長屋の西から2軒目に位置する。震災で、4軒すべて全壊判定を受けた。建物は崩落をまぬがれたが、傾き、屋根や壁の損傷がひどく、公費解体申請を役所に出すことになった。ところがある時、宮本氏は自ら申請を取り消し、建物補修の決心をする。四軒長屋の建物であるから、公費解体が受理されると、住みかは4軒同時に地上から消滅する運命にあった。しかし頑として解体を主張する西角の1軒だけを切り離し、残り3軒を残して補修するまでには、気の滅入る煩雑な手続きがいくつも必要だった。だが、宮本氏は、どうしても補修にこだわった。

家を残すことに、それほどまでにこだわったのはなぜだろうか。宮本氏が建築の専門家で、建物の基礎部分に致命的な損傷が及んでいないことをいち早く認識できたということ

もある。崩れた建物が公費解体された後、厚生省の管轄となり、価値のないゴミと見なされ、事務的に処理されてしまうこと。巨大なゴミとなった家の死骸が、大気や海を汚し、ツケを先送りするように子孫に残されていくことに疑問を感じたこともある。しかし最大の理由は、生家であるこの家が、氏の大切な記憶の場所だったということであった。家の内部の古い柱には、かつて5月の節句に刻まれた「柱の傷」がひそかに息づいていた。ほかにもなつかしい思い出がいっぱい詰まった記憶の家であった。解体申請し、所有権を放棄した時点で、それら記憶も壊されてしまう。どうしても記憶を残したいという気持ちが、公費解体を思いとどまらせ、何とか補修する道を選んだ最大の原動力だったのであろう。

真夏のある日、何人かのメンバーと、今は「ゼンカイの家」と名付けられた事務所を訪ねた。

まず目に飛び込んできたのは、むきだしになった白い鉄骨だった。まるで恐竜の化石のように、傷口から生えでた鉄骨が、縦横斜めにはり巡らされ、全壊した古い家をしっかりと支えていた。記憶の物質のように、それは家を支え、内部で息づいていた。すでに隣家は取り壊され、空き地には草がおい茂っていた。境目の壁面は剝がされ、半透明の鋼鈑と波型ガラスで覆われていた。おおよそ1世紀の間、人々の日々の暮らしを支えてきた木造の建物と、一見無機的な鉄骨が、何の違和感

もなく、絶妙のバランスで融和し、ひとつの風景をつくっていたことが私たちを感動させた。

被災後、大きなダメージを受けた建物は、しらみつぶしに調査され、全壊、半壊、一部損壊という3段階のランクをつけられた。

この判定は義援金などを受け取るために必要な被災証明であり、全壊判定の全ての建物が、本当に安全性を失ったという事ではなかった。壊れて修復不可能な建物と、修復可能な建物とがあった。

ところが全壊判定を受けた人は、全壊という言葉におびえ、もう一度大きな揺れが襲ったら、今度こそ家は間違いなしに潰れるだろうという恐怖感から、公費解体申請に流れていった。こうして、家は次々と取り壊されていった。補修すれば生き返る家まで壊されていった。その跡は無表情な更地となった。やがて新しい建物が建っていく。しかし、どれも似たようなプレハブの家。

その中で、ひとり存在を主張するかのように「ゼンカイの家」は建っている。100年前、希望に燃えて家は完成した。50年前、戦災をくぐり抜けた。そして3年前、あの災厄を経験した。いや何より、震災の記憶を刻み、「ゼンカイの家」は、街の中でひっそりと生き続ける。　(震災・まちのアーカイブ会員)

註：宮本佳明（みやもと・かつひろ）氏は1961年兵庫県生まれ。84年東京大学工学部建築学科卒業。96年ヴェニス・ビエンナーレ第6回建築展で最優秀パヴィリオン賞。「ゼンカイの家」に関しては氏自身の論考「もうひとつの廃墟論」が、笠原芳光・季村敏夫編『生者と死者のほとり――阪神大震災、記憶のための試み』（人文書院、1997年）にある。

■会員募集のお知らせ

「震災・まちのアーカイブ」では会員を募集しております。震災一次資料の保存に関心をお持ちの方、ぜひご参加下さい。資格は特に問いません。活動に知恵と労力を提供して下さる方を会員としています。活動日は第1・3木曜と第2・4土曜（10時～5時）。お気軽にお越し下さい。

また、賛助会員も募集しております。賛助会員には、『瓦版なまず』（奇数月に発行予定）『なまずブックレット』および研究会の案内をお届けいたします。またアーカイブ所蔵の震災一次資料の閲覧、アーカイブ震災文庫の利用を行うこともできます。

年会費は1口1000円。1口以上おさめていただいた方は、賛助会員として登録させていただきます。（郵便振替 00920-2-125759、震災・まちのアーカイブまでお願いします）

■賛助会費・カンパ・切手代……のお礼

たくさんのご支援をありがとうございました。お名前を記して感謝申し上げます。

阿部安成　井上平三　大門正克　落合祥堯
落合裕子　郭建剛　片岡法子
グェン・ファン・トワントイ　小山仁示
実吉威　芝村篤樹　佐藤幸子　下野恵美子
高森一徳　瀧克則　滝村俊朗
萩と神戸を結ぶ会　日比野正代　松本貢
被災地NGO協働センター　八十庸子
山本正和　（敬称略）

［シリーズ　私と記憶／私と記録②］

メモ（1998.8.28）

木内　寛子

風化という言葉をことを美しいと思う。
＜風化：岩石が長い間空気にさらされてくずれ、土になる現象。＞（岩波国語辞典）。なぜ、変わってはいけないの、忘れてはいけないの。記録という異物。

＜それは忘れるにまかせることにしている。私にとって本当に必要であったら、それは再び現れるに違いないと信じている。＞（吉岡実「私の作詩法？」思潮社現代詩文庫14所収）。

地震後の風景の中での看板の奇妙さ。崩れたり、傾いたりしている建造物の中に看板の文字は崩れず。

ストーリーテリング、昔話などを書物から覚え、書物を見ないで語ることをしている。昔話の研究者が、ストーリーテリングは昔話を互いに楽しむには有効だが、口承として伝わっていく力はもうそのことばにはないだろうという意のことを書いていたのをなぜだろうと記憶している。

兵庫県南部地震にあって、書いておこうと思った。こんなこと、めったにない。

震災・まちのアーカイブで目録づくりのために資料に接している。記録に残すことを意図したというより、必要のために書いたものが活動のあとに残ったという感じのものだ。

記録は書き換えれば変わるけれども、記憶は変わるまで変わらない。

今も地震に関わっているのは、被災者として十把一絡にされそうな、されてしまったあのころの報道などによって醸された勢いに対する、うらみ、であると思っている。

（震災・まちのアーカイブ会員）

【コラム】みききぐさ　被災地・視聴草　その二

「経験といわれるものは常に経験の半分にしか過ぎない」（ゲーテ）。晩夏、藤田省三氏の「後ろ姿について」という文章の中で発見したこの言葉を抱え、手術台にのぼった。まばゆい光が右目直撃。過剰な光の襲来のため、あらゆる像はとらえられない。たぶんそのとき、麻酔の針が右眼球を貫いていたはずだ。被災の経験。生き残り、こう書くのは、ときにおこがましい。あんな思いを共にしたのに、私たちは経験の半分の半分さえ、いまだものにしていない。

病室で一人の老人に出会った。昭和初年生まれ。肩で風を切ってきた人生。広島「仁義なき闘い」でも、最末端を担ったという。兵庫区金平町の博徒渡世人。震災で家屋全壊。下半身を梁や家具に挟まれ複雑骨折。もはや杖なしでは直立歩行はできない。「悪業のタタリやろか。そやけどギッチョン、ギッチョン。杖ついて、やるしかない」。つぶやく老人の後ろ姿。ギッチョンは、松葉杖が廊下にこだまする音。老人なりの経験がこもっている。私の胸に、少しさびしく、ユーモアこもった音が刻みこまれる。記憶と記録のオノマトペ。たちどころ思い出す音があった。【今度生まれたら。海員が唄う。ぎーこたん、ばつたりしよ・・・】（中原中也・港市の秋）四度目のさみしい秋の訪れである。

（罵詈山房主人）

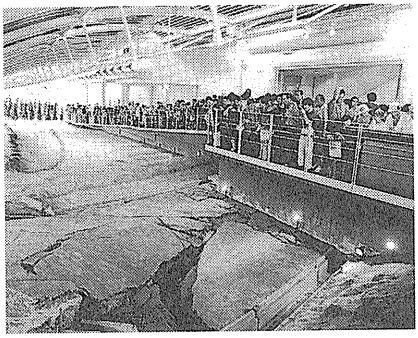
[探訪]

断層の断片――野島断層を訪ねて

藤原　直子

3年前の冬、連日伝えられる震災の映像の中、北淡の地を這うように走る活断層の裂け目に、目を見はった。「地球にひびが入った……」。大地が裂け、山が崩れ、そして私達は忘れかけていた地球の鼓動を確認することになる。

8月29日、私達アーカイブのメンバーは、昼までの作業を終え、長田区の事務所を出て、野島断層の見学のため、淡路島に向かった。今春、開園した北淡町震災記念公園には、国指定の天然記念物となった野島断層を、そのまま保存、展示する野島断層保存館がある。快晴のもと、明石海峡大橋を渡って、高速を降り、20分程、海岸沿いを走って着くと、まず、人の多さに驚いた。夏休み最後の土曜日とはいえ、観光地の華やかさに、面喰らってしまった。500円の入場料を払って中に入ると、まず、エントランスホールがあり、地震の断層についての展示物や、パネルが並んでいる。が、しかし、人々の足は次に続く断層保存ゾーンへと、足早に流れて行く。私も、



又、興味に従って、その流れへと乗った。人の肩ごしから、のぞき込むと、140メートルにわたって走る断層が、目の前に現れた。順路に沿って、道路、畑、家の生け垣が、断層によって破壊され、上下、左右のずれを見せていた。野島断層は総延長10キロメートル、山側の岩盤が海側から見て右へずれ、山側が海側へ、のし上がった逆断層であると、説明があった。目の前にした断層は、3年数ヶ月の歳月を経たからであろうか、地を裂く荒々しさは感じられず、又、美しく整備された建物に切り取られた風景は断片的で、そこから、10キロメートルに及ぶ活断層の全体像を結びつける事が、私にはできなかった。私の想像力が、その囲いから出て、自然の力を見せつけた「地球のひび」を感じとるためには、遮断された、その向こうの風や音が、必要だったのかも知れない。

最近、「地球に優しい」「自然に優しく」といった言葉を、よく耳にするけれど、この言葉は風も吹かない、音も聞こえない、そんな中から生まれた、想像力のない貧しい言葉に思えてならない。確かに地球は、かけがえのないデリケートな自然を持つものだが、反面、私達の計り知る事のできないエネルギーを持つものだという事を、置き去りにしている。大地は裂け、山は崩れる。地球の鼓動は今も打ち続けている。

断層の見学を終え、保存館の前にある物産館に入ってみた。淡路の名産品に混じって目をひいたのが、断層の写真をそのままパッケージにした「野島活断層マーブルケーキ」だ

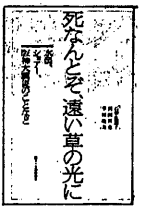
った。見本を見ると、厚さ1センチ、ほぼ5センチ四方のスポンジケーキの中に、見事に断層の模様が表現されている。断層とケーキ。およそ結びつきそうにない物が、商品として完成され、新しい淡路の名産品として、産声をあげている。パッケージの写真の下には、「まだ記憶に新しい、阪神淡路大震災のまだ消えぬ爪跡。大自然の前では人間はあまりにも無力なものでした。犠牲となった多くの尊い命。そんな中で逞しく生きる人々を、私達は応援しています。」と、メッセージが込められている。多くの犠牲をうんだ断層の驚異を経験しながら、それをケーキにして売るという、発想の豊かさと、大らかさに思わず頬がゆるみ、お土産に持ち帰ったのである。

（震災・まちのアーカイブ会員）

あの震災はなんであるのか。何度もおもい起こすこと。深く想起すること。

季村敏夫 編集 三部作

「震災の記憶」——その精神史的試み



石牟礼道子・岡田哲也・季村敏夫『死なんとぞ、遠い草の光に——水俣、ショアー、阪神大震災のことなど』震災・活動記録室、1996年、500円

震災の年、水俣に石牟礼道子氏を訪ねての対話。一人ひとりの体験を人間の経験にまで深めることはできるか。

（送料180円）

笠原芳光・季村敏夫（編）『生者と死者のほとり——阪神大震災・記憶のための試み』人文書院、1997年、1900円

佐々木幹郎・細見和之・野田正彰・宮本佳明氏らによる論考と宮本隆司氏の写真。さまざまな声の場所、「ほとり」から考える。

（送料310円）

季村敏夫『エチカ・震災精神史への試み——家族の崩壊、国家の崩壊』震災・まちのアーカイブ、1998年、300円

正史ではなく、敗者の沈黙に立脚した歴史。この土地に離れ難く生き、やっと立ち上がろうとする一人へのこだわり。この立場からエチカ（倫理）を問う。（送料140円）

○震災・まちのアーカイブで販売中です。購入希望の方は代金と送料を振り込んで下さい

振込先：郵便振替 00920-2-125759　震災・まちのアーカイブ

○ご注文の内容によって送料が異なりますのでご注意下さい。

『死なんとぞ』+『生者と』310円、『エチカ』+『生者と』310円、

『死なんとぞ』+『エチカ』 210円、『死なんとぞ』+『生者と』+『エチカ』340円

[寄稿]

歴史事実を問い直す意味

青山　真由美

なぜ、日本には公娼制度があって、遊郭というものが存在したのか。その名残のせいか、ソープランド街が今もあちこちにあるのか。五月末、神戸・福原の街を歩きはじめたのは、こうした疑問がきっかけだった。

一方、従軍慰安婦問題が国内で盛んに議論されている。遊郭で働く娼妓たちの存在を許していた日本社会とこの問題は、どこかつながりがあるのではないか。私たち日本人女性も元慰安婦と名乗り出た人たちを、同性の苦しみとしてでなく「アジアの気の毒な人たちのこと」という目でみていないか。こうした発想をしてしまうこととも関係していないか。そう、漠然と考えてもいた。

これまで特に、慰安婦問題について関心を持って本を読んでいた訳ではなかった。当時の遊郭経営者らから娼妓たちを取り巻く状況を聞いているうちに、彼女たち自身が「国のために」慰安婦としてこの神戸から海を渡っていたことを知り、新鮮な衝撃を覚えた。戦中戦後を通し、遊郭経営者らも慰安所を経営する構造に組み込まれていったことも分かった。歴史記録といえば大それているが、体験者の証言を、一つの「影の女性史」として記事に残しておきたいと思うようになった。

貧しく身を売るしかなかった社会の底辺にいた日本の娼妓たち。戦争では、国籍を問わず、犠牲になるのは誰なのか。そして被害者が声をあげ、日本政府を告発することで、見えてはいたのにこれまで日本人が問題視できていなかった事実が戦争の性犯罪として改めて眼前につきつけられた。こうしたことを日本の一部の女性たちが気づき「歴史の問い直し」を始めていることも分かった。

「震災・まちのアーカイブ」とはこのような取材の中で偶然出会い、読書会に参加した。生活再建できた者とそうでない者との二極化が進み、被災者が少数派となりつつあるこの被災地でも被災者側からの「歴史の問い直し」の必要性はあてはまるのではないか。読書会で提起されたこの問題は、ふだん震災取材をしている私自身にも「何のために報道するのか」ということとつながり、考えさせられた。

メンバーたちは今後、聞き取りを通して被災者の体験を記録していきたい、という。従軍慰安婦問題のように、それで新しい歴史が生まれ、社会意識を変革する力にまで高められるかもしれない。フィールドワークは地道で大変な作業だが、歴史を積み上げる、意味のある仕事だ。その活躍を期待したい。

(神戸新聞記者)

【編集部註】8月15日『神戸新聞』の「女たちの8・15——検証・従軍慰安婦制度」と題された連載記事に、アーカイブ第2回研究会、季村敏夫氏報告による上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』の読書会の模様が掲載されました。従軍慰安婦に関する新証言を掘り起こし、現在の「慰安婦」問題をめぐる状況を描いたこの連載を読む中で、私たちは自分たちの活動が同時代の歴史認識の問題と密接に関わっていることを改めて認識しました。記事を採録するにあたって、筆者の青山さんにご寄稿いただきました。フィールドワークを通じて歴史を積み上げること。その重さを引き受けることができるか。私たちの真価が問われているのだと思っています。　(T)

［採録］

女たちの8・15

検証・従軍慰安婦制度

（下）

再審

もう一つの歴史たどる

抜けていた被害者の視点

七月下旬、神戸市内で開かれたその読書会には、被災者や大学院生ら七人が集まった。

取り上げられたのは、社会学者上野千鶴子さんが書いた「ナショナリズムとジェンダー」。上野さんは本の中で、それまで売春の範ちゅうで語られてきた慰安婦問題が、当事者の告発を機に「性犯罪」との視点が生まれ、「日本の歴史の再審」が始まったと指摘した。

その考え方が、集まった七人には刺激だった。震災記録の作り方を模索する「震災・まちのアーカイブ」のメンバー季村敏夫さん（四七）は、こう切り出した。

「従軍慰安婦問題と、今被災地が直面している問題はつながっていないか」

つまり、被害者や少数者が声を上げることで、国家の正史に対してもう一つの現実を作り出せるという意見だった。

「歴史の再審」

今、従軍慰安婦の問題は、性国際戦犯法廷」の開催準備が女性たちの間で進む。

二〇〇〇年、東京で日本政府の法的責任を問う「女

東京裁判では、まったく従軍慰安婦問題が扱かれなかったからだ。

今夏、性暴力などを含めた今後の戦争犯罪を裁く国際刑事裁判所（ICC）設立条約が、ローマで採択、国連小委員会は日本政府に、元従軍慰安婦に対して損害賠償するよう勧告した。

五十三年前の「八・一五」から清算されずにきたさまざまな問題が、ようやく問われようとしている。

◇

神戸・福原遊郭の元楼主（八二）の話に戻る。

中国などで従軍慰安所を経営していた男性だ。彼は、戦後の混乱期、警察から特殊慰安施設の開設を求められ、正直、嫌気が差した。

「警察から婦女子を守れと言われているのに、こんな商売していいのか」

彼は間もなく、業界から身を引いた。その後、さまざまな仕事に携わったが、心の隅に沈んだ重い澱（おり）が消えない。

「今からみると、私は国賊ですよ」

八十年以上にわたって、日記を丹念に書いてきた。ただし、いつ、どの段階でなくなったのか、いや、捨ててしまったのか。慰安所時代の日記だけが、書棚から抜け落ちている。

一九九一年、元従軍慰安婦の韓国人女性が日本政府に対して謝罪と個人補償を求める裁判を提訴したのが、大きなきっかけだった。

昨年五月には「女性・戦争・人権」学会（事務局・近畿大学）が発足した。メンバーの大越愛子同大助教授は「力の政治としての戦争論はあった。しかし、犠牲になる女性、子どもの立場から戦争を問う視点が抜けていた」という。

読書会。歴史の読み直しに論議が白熱する＝神戸市長田区

53回目の夏

『神戸新聞』1998年8月15日(土)夕刊

[民間アーカイブの系譜②]

「文庫」の精神

<1>

寺田　匡宏

民間における記録や資料の保存。これを民間アーカイブと定義する。とはいうものの、この言葉は果たして歴史の重みにたえうるだろうか。「民間アーカイブ」の歴史を検証するこの作業を通じて私たちが考えたい課題は、この点にある。果たして「アーカイブ」は、普遍的な概念たりうるのか。一方で、戦後史を見れば、さまざまな「文庫」がある。戦後史の中の民間アーカイブの実体はさまざまな文庫である。では文庫とは何か。そしてわれわれは文庫の精神から何を読み取るべきなのだろうか。

「筑豊文庫」

上野英信氏の主宰した「文庫」である。『追われゆく坑夫たち』『地の底の笑い話』『出ニッポン記』『眉屋私記』。筑豊の地から、炭坑の闇から、日本資本主義の原罪を問うた氏の作品は、その地に根をはった氏の生活から生まれていた。その根拠地が、筑豊文庫である。

1963年、上野氏は、家族とともに移り住むため福岡県鞍手郡、新目尾(しんしゃかのお)の廃坑部落に建つ長屋一棟を買い取る。建物は、国税局の差し押さえ物件。その荒れ方は、尋常ではない。「長崎の竜踊(じゃ)りみたい」と夫人に言わしめた建物は、うねり、波打ち、ねじ曲がっていた。

廃坑部落では生活保護を受けた者同士の密告が横行していた。疑心暗鬼の廃坑部落で氏はどのように受けいられたか。その過程は、「竜踊り」の修理の過程でもあった。長屋の修築という作業を通じて、氏は部落に受け入れられたのである。

その修理を手伝ってくれた一人の男性がいた。上野氏は彼の言葉を活字に残している。「狭うてよか。なんとかしてぜひ一部屋、泣き部屋をこしらえてほしか」。泣き部屋がいる。辛くて、情けなくて、気の狂いそうになるとき、女房子どもに遠慮せずに心の晴れるまで泣くことのできる部屋が。Nさんはこう頼んだ。

「特定の一室ではない。この一棟全体が、男も女も含めて、生き残った人間ばかりでなく死者も含めて、さらにまた、筑豊のみならず日本の地底に埋められた生者と死者、過去と未来を含めて、一つの巨大な泣き部屋になるように。私はそう祈らずにはいられなかった。そして、そのような思いを込めて、復旧した長屋の玄関に「筑豊文庫」という看板を掲げた。」(『廃坑譜』筑摩書房、1978年。のち『上野英信集4』径書房、1985年所収)

「筑豊文庫」。上野氏は、この言葉に深い思いを込めた。過去と未来、生者と死者が出会う場。この志こそが、「文庫」の精神だと思う。文庫とは、決して本が並んでいるだけのところではない。その人の精神にとってかけがえのない場所を意味する。資料を保存する、記録を残す。文庫の精神は、それが精神の根拠地をつくる営為であることを語っている。　(震災・まちのアーカイブ会員)

[報告]

震災・まちのアーカイブ活動一覧（1998年2月～9月）

■活動日誌

2月 19 日(木)　鷹取中学を訪問、避難所運営に関係一次資料の保存状況について聞き取り
3月 14 日(土)　設立の集い
3月 28 日(土)　第1回研究会。季村敏夫氏による報告「家族の崩壊について――阪神大震災、神戸児童殺傷事件から見えてきたもの」。参加者8名
5月 21 日(木)　野田高校を訪問して西畑康次教諭から震災時の避難所運営について聞き取り。その後、喫茶店「アール」に場所を移し、店主森山千代江氏を交えて震災時の話を聞く
5月 30 日(土)　『エチカ・震災精神史への試み――家族の崩壊、国家の崩壊』<なまずブックレット①>を発行
7月2日(木)　『瓦版なまず』1を発行
7月 18 日(土)　朝日新聞・井上平三記者来所。第2回研究会開催。季村敏夫氏による報告「上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』をめぐって」。参加者：8名。神戸新聞・青山真由美記者による取材
7月 23 日(木)　東京でミニコミを収集保存している「住民図書館」の矢澤直子氏来所。同館の現状や民間アーカイブの今後について話し合い
8月5日(水)　建築家・宮本佳明氏の事務所を訪問して「ゼンカイの家」に関するインタビュー
8月6(日)(木)　事務所に神戸新聞・西海恵都子記者来所
8月 27 日(木)　六甲グランドパレス高羽復興住民会議の鶴田守人・高野紀子・若原キヌコ氏に公費解体について聞き取り
8月 29 日(土)　淡路島に渡り、野島断層記念館・北淡町歴史民俗資料館で現地調査
9月5日(土)　「被災地倶楽部」に公費解体の取材のため出席

■受贈資料

野田高校避難所関係資料（西畑康次氏より）
「すたあと長田」関係資料（すたあと長田より）

■刊行物

季村敏夫『エチカ・震災精神史への試み――家族の崩壊、国家の崩壊』<なまずブックレット①>（5月30日）
『瓦版なまず』1（7月2日）

■新聞・雑誌掲載

『神戸新聞』4月21日(火)夕刊社会面
「震災4年目」「ボランティア仕切り直し」「長期化にらみ再編」「改称や移転で活性化図る」（宮沢之裕記者）
『週間読書人』6月19日地方から
「エチカ・震災精神史への試み」「「震災・まちのアーカイブ」から刊行」
『窓友新聞』6月
「窓友会あの人この人」「震災の記録のためにブックレット刊行」「季村敏夫」
『神戸新聞』7月9日(木)朝刊・地域面
「震災の記憶とどめよう」「研究会での報告ブックレットに」「失われゆく共感、仮設の高齢者…」「神戸の市民グループ　震災・まちのアーカイブ」「家庭、地域の精神史考察」（西海恵都子記者）
『模索舎月報』7月
「エチカ・震災精神史への試み」「なまずブックレット1」
『神戸新聞』8月15日(土)夕刊・社会面
「女たちの8・15　検証・従軍慰安婦制度<下>」「再審」「もう一つの歴史たどる」「抜けていた被害者の視点」（青山真由美記者）
『朝日新聞』9月4日(金)夕刊・文化面
「大震災時のチラシ・配給表…」「二組織が収集・保存」「被災地に残すことが大切」（井上平三記者）

■文献

寺田匡宏「震災記録保存問題」『史料ネットNEWS LETTER』13、1998年5月20日
寺田匡宏「根拠地を持つこと――「震災・まちのアーカイブ」によせて」『WAVE117』3、1998年6月
矢澤直子「市民記録の収集・保存・活用――その現状・課題と今後の方向性」『社会教育』627、1998年9月
寺田匡宏「公費解体の功罪検証を」『神戸新聞』1998年9月7日朝刊「論」

震災・まちのアーカイブ　記憶と記録のフィールドワーク

『検証・公費解体――つぶやきの震災精神史』

ご協力のお願い

◆震災から3年半が過ぎ、さまざまな分野で検証が進められています。私ども、「震災・まちのアーカイブ」では検証を文化的な側面から行おうとしております。

◆「公費解体」。今、私たちはこの出来事に取り組んでいます。

◆震災後まちはすっかり姿を変えてしまいました。一体何が起こったのか、大勢の方が訳の分からないまま、圧死とされ今もそのままです。外観だけは、ほとんど元に戻ったまちの風景を眺め、「あの死者は、まるでなかったようだ」。こんなつぶやきが印象的です。だが、外側の復興が進んだ分、目に見えないところの傷はいっそう深くなっています。やっと元に戻れたときから、がくっと力つきる。こんな事態、誰が予測できたでしょうか。

◆私たちは、「公費解体」の調査、検証、フィールドワークを行いながら、震災の「もう一つの現実」を浮かび上がらせたいと思います。そのことが、歴史の中で阪神大震災をとらえる一つの手がかりになると思うからです。死者との対話。沈黙への配慮。今こそ、微細な視点が必要ではないでしょうか。復興の流れから忘れられていた小さなつぶやき、そのささやかな声によりそうことが私たちの立場です。

◆「検証・公費解体――つぶやきの震災精神史」。公費解体を、今振り返ったとき、はたしてどのような震災像が描き出されるのでしょうか。これで本当によかったのでしょうか。この試みでは、さまざまな証言（ことば・映像）で、公費解体を検証したいと思います。

◆夏から秋を経て4度目の冬。研究会、フィールドワークを積み上げ、多くの方々とともに、「もう一つの震災像」を共有する。その過程を通じて、震災の記録と記憶を考える。阪神大震災を、歴史的、社会的広がりの中で考える一つの試みとしたいと思います。

みなさんの証言（ことば・映像）をよせて下さい！

「震災・まちのアーカイブ」では「公費解体」にまつわる、さまざまなつぶやきを集めています。どんな小さなことでも結構です。公費解体に関する、証言（ことば・映像）を寄せて下さい。

○震災でなくなった建物の思い出を教えて下さい

○解体された家、解体されてゆく建物の写真、ビデオなどがありましたら複写、ダビングさせて下さい。

○公費解体に関するつぶやき、「あのときは仕方なかった」「せやけど、こんなことならせなんだらよかった」など、何でも結構です。ぜひ、お聞かせ下さい。

ご連絡は　震災・まちのアーカイブ事務所　Tel078-681-6231　Fax078-681-6232
または季村範江 078-781-8891(Tel/Fax)／寺田匡宏 0797-22-5288(Tel/Fax) まで

【編集後記】『瓦版なまず』2号をお届けします。前号から3ヶ月ぶりの発行です。発足から半年、アーカイブの活動も少しづつ、幅を広げてきました。春から夏にかけての模索の跡を読み取っていただければ幸いです。（T）

1998-12-3

3

瓦版なまず

kawaraban namazu

瓦版なまず　第3号
編集人：寺田　匡宏
発行人：季村　範江

震災・まちのアーカイブ
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4　神港金属㈱内　Tel;078-681-6231 Fax;078-681-6232 E-mail;kioku@kh.rim.or.jp

［ノート］

骸骨・なまず・ビラ

――『阪神大震災 さまざまな声の栞』発刊によせて――

寺田　匡宏
TERADA, masahiro

震災の一次資料を残すこと、震災の記録を伝えること。私たち「震災・まちのアーカイブ」はこのことをめざして活動している。しかし、残す、伝えるという営為は一体どんな意味をもつのだろうか。神戸市長田区、東尻池の地に通いながらこの自問を繰り返す。かつて被災地で繰り返された「記録を残すことに力を注いでよいのか」「できるだけ現実の救援に取り組むべきではないのか」という議論、二つの立場の葛藤を改めて想起する。残す、伝える立場に徹することの難しさ。一体、私たちはこの難問をどう解けばよいのだろう。このほど、震災・まちのアーカイブでは『さまざまな声の栞』と題する小さな冊子を発行した。この『栞』のめざすところを手がかりに考えてみたい。

地震から4度目の秋、倒壊した駅舎がやっと再建された阪急伊丹駅（これに比べると、阪神高速はじめ他のインフラの復旧がいかに早かったことか）にほど近い美術館で、小さな展覧会が開かれていた。「ホセ・グァダルーペ・ポサダ展」。19世紀の末から20世紀初頭、メキシコで活躍した版画家の作品展である(◆)。

ポサダの骸骨（『名古屋市美術館コレクション ホセ・グァダルーペ・ポサダ展――骸骨の舞踏』伊丹市立美術館、1998年より）

1900年代初頭、メキシコでは一連の社会変革が進行していた。スペインからの独立、ヨーロッパ諸国の干渉への抵抗、独裁政治の打破、「メキシコ革命」。ポサダの版画は、その革命のうねりの中で生まれた作品群である。とはいうものの、それは革命の理想を描いたプロパガンダ版画でもなければ、戦闘をリアルに写し取った版画でもない。実は、骸骨の版画なのである。

メキシコ革命の指導者フランシスコ・マデロの骸骨が酒瓶片手に歩いている。農地解放運動の国民的英雄エミリアーノ・サパタは骸骨姿でサーベルをぶら下げ去っていく。ピストルを腰に馬で疾駆する「革命的骸骨」。新聞発行人も骸骨である。骸骨とはメキシコで伝統的に民衆に人気の図柄だという。ポサダは、民衆の心の中の骸骨を換骨奪胎し、新らたに彼自身の骸骨を作り上げたのである。

会場には、ポサダの他の作品(宗教画など)も展示されていたがメインは、骸骨。確かに目玉だけあって、骸骨の版画は見応えがある。しかし、現物を目にして一番の発見は、骸骨がごく粗末な紙に刷られていたという事実だ。骸骨が、ピンクや緑の仙花紙風ワラ半紙に印刷されている。この点こそが、図録や本ではわからない、その場に足を運び実物を目にしてはじめてわかるおもしろさだった。

骸骨はビラの中に宿る。しかも、粗末なワラ半紙のビラに。この事実を目にして即座に浮かんだのは鯰絵のことである。幕末、安政江戸地震の直後(翌々日から!)、江戸の巷にはのちに「鯰絵」とよばれることになる錦絵版画があふれた。この鯰絵のなまずが頭に浮かんだのだ。

阪神大震災後、鯰絵が歴史の中からよみがえり、現存する鯰絵を網羅したカタログが発行された。それをひもとくと一口に鯰絵といっても様々ななまずがいることがわかる。切腹して腹から小判をまき散らしているなまず。黒紋付を着て詫び証文を書くなまず。鈴を振りつつ鹿島踊を踊るなまず。これらなまずが意味するところに関しては、いまだ明らかでないことも多い。しかし確かなのは、このなまずが地震の余塵収まらぬ江戸の町で、幕府の発禁をものともせず刷りまくられ、その数数百種類に及んだということである。

骸骨となまず。太平洋の東と西で、ほぼ同時期に生まれた二つのメディアは、どちらも吹けば飛ぶビラという形で市井の人々の手に渡った。吹けば飛ぶ。読めば棄てられる。しかし、読み棄てられるビラにこそ刻まれた歴史がある。声明、宣言、檄文、パンフレットや論文といった完成された主義主張ではない。そこに行き着く以前の形にならない何か。八衢(やちまた)に漂うささやかな願い、諦め、うらみ、期待。そのつぶやきをすくいとり形にしたら、それが骸骨であり、なまずだったのだと気付く。

さて、『阪神大震災 さまざまな声の栞』である。今回私たちは掌中に収まる小さな紙片を束ねてみた。手記や抗議文や声明になる以前の被災地の声。その声を形にするためのうつわである。そのうつわで伝えること、残すこと。いま被災地で、骸骨やなまずはどこに隠れているのだろうか。すくい取れないものをすくうためには、私たちなりのビラを持つことからはじめるしかないと思っている。

(震災・まちのアーカイブ会員)

◆伊丹市立美術館「ホセ・グァダルーペ・ポサダ展——骸骨の舞踏」1998年9月26日～11月3日。

【参考文献】鶴見俊輔『グアダルーペの聖母——メキシコ・ノート』(筑摩書房、1976年、のち『鶴見俊輔集11 外からのまなざし』筑摩書房、1991年)。「鯰絵総目録」(宮田登・高田衛(監修)『鯰絵——震災と日本文化』里文出版、1995年)。野口武彦『安政江戸地震——災害と政治権力』(ちくま新書、1997年)。

［覚え］

つぶやき

――公費解体編――

ささき　かずこ
SASAKI, kazuko

子どもたちと「私」は、この街で育てられた。ずっと「私」を育んでくれたまちが壊れた。地震の後、坂の上から、変わっていく芦屋の街をじっと見ることが多くなった。

1998年4月、「公費解体を問い直す」――アーカイブではじめて話題にのぼったとき、思わず首をかしげた。「壊れた家は、自分らで片付けなあかんのやて。ものすごう、お金がかかるんやて」。地震直後、避難所に敷き詰めたふとんの上での被災者たちの会話を思い出した。公費解体が始まったとき、人びとは役所の窓口に殺到した。行政は、「被災の負担軽減」と胸をはった。それに疑義をはさむ人たちがいる。不思議だった。

7月、「公費解体の検証」をかかげた。検証とは、「物事を実際に取り調べて証明すること」(広辞苑)。被災地の中に暮らす「私」にとって、検証をおこなうことは、なかなかむつかしい。隣人として、家をめぐるさまざまな話を見聞きすることは多い。だが、「取り調べて証明」するためには、隣人にもう一度確認の質問をおこない、「事実関係」を明らかにする必要がある。どうもこの過程が、苦手である。相手は、ただ聞いて欲しかっただけ。もう一歩踏み込むのをためらう「私」がいた。

8月、宮本佳明氏の「ゼンカイの家」を見せてもらった。解体をまぬがれた木造の家は、白い鉄骨を支えに、毅然と立っていた。マンションの「安易な解体、建て替え」に異論を唱える人たちの話を聞きにいった。彼らは、自分たちの住み家の確保のために、集い、学び、たたかっていた。いずれも、公費解体に苦しんだ人たちである。「被災者のため」だったはずの行政とのミスマッチは、どこで生じたのだろうか。「私」の中にも、少しずつ疑問が芽生えてきた。

10月、資料を中心とした勉強会を行った。公費解体の前提となる「全壊」に注目した。罹災証明の「全壊」とは、災害救助法を適用する基準として、法律的にさだめられた「全壊」。「住宅が滅失したもの。あるいは、補修しても家屋として再使用することが困難なもの(損害程度が50％以上のもの)」(『阪神・淡路大震災――神戸市の記録 1995年』(1996年1月)。一方広辞苑では、「めちゃめちゃにこわれること」。建物の損傷程度を表わす「全壊」。猛烈な復旧復興の流れは、この違いに注意を払う暇をあたえなかった。永遠に建物を消滅させてしまう解体。それがもたらす結果まで考えるゆとりもなかったようだ。

震災から4年近くがたった。地震の後、何人かの知人を永遠の旅へと見送った。いずれも、この街で、子どもたちを一緒に育てた人たちである。また坂の上から、変わってしまった芦屋の街をじっと見ることが多くなった。このあたりで少し立ち止まって、さまざまな面から、震災をひもといてみたい。

(震災・まちのアーカイブ会員)

［シリーズ　私と記憶／私と記録③］

私たち、私自身へのメモ(1998.11.22)

木内　寛子
KIUCHI, hiroko

＜平原で輪になって、みんなで座っているとしよう。輪のまんなかに、色を塗った太鼓かタカの羽根を置いてみる。すると、われわれはその太鼓や羽根を、一人一人異った角度から眺めることになる。われわれ一人一人が座っている場所が、みな違うからだ。＞(『セブン・アローズⅠ』ヘェメョースツ・ストーム著　阿部珠里訳　地湧社　1992年)

●

書いたものに、自分の名前を記し日付を記す。

私の場合それは、書いたものをそこに封じ込める行為としてある。その日付の私は今の私ではない。そのことで私は、自分から離れたものとしてそれを読み考えることができる。また、位置が明確になることによって、書いたものは他者性をもつ。他者への批評性をもち、同時に他者からの批評が可能になる。

記録は名を記すまでもなく、私の記録でしかありえず、日付は書いているときの日付でしかありえないのではないだろうか。だが、私の記録のままでは記録は他者に開かれることはない(ひょっとしたら自分自身にも)。「私の記録」を開こうとするとき、なんらかの表現というかたちをとらざるを得ない。

私、私たちの位置。「一人一人異なった角度」。「一人一人が座っている場所が、みな違う」位置。他者との関係、私を開こうとすること。

●

書く。だが、私たちは何を書いているのだろうか。結局、それぞれの記憶を書いているのではないだろうか。直接ふれることができない、それほどに私たちそのものである、それほどに私たちから遠い、記憶を。

記憶。私の記憶、私が意識できる記憶、記憶にない記憶、促す記憶。音。声。私たちの仕草。ことば。私たち全体がひとつの大きな夢に見られている、との神話。

●

＜見えるものは見えないものに接している。見えないものは見えるものに接している。＞正確ではないと思うが誰かの言葉として聞いた。ときどき、まじないのように繰りかえしている。記念碑でもよい、書かれたものでもよい、木の切れ片や光の動き、あるいはもの自体でもよい、逆に記憶でもよい。見えるものは見えないものに接している。見えないものは見えるものに接している。それを見る、そこにある、出会う私という存在、の想像力、すりあわせる力、それ以前の出会う力。私という存在の鍵。

●

野島断層保存館へ行った。断層を見ながら隣の人が「ほんとうに(あの地震は)あったんやなあ」(なぜか関西弁になってしまったが話されたのは違う地方のことば)と言っていた。私にとっては「えっ、これ？」と笑いたくなるものだった。こんなものであれだけ大

変だったの、と。その断層が岬の先端までつづいて海へ消えていると聞いたとき、龍だ、と紙一枚隔てたような感覚で思った。形状も動きも力も龍という一言でいいつくされる。龍という存在を生みだした昔の人の想像力を思う。

●

「感動がなければことばは出ません。」ことばがでない子どもの相談にいったとき K先生はきっぱり言いきられた。私は深く思うことなしに書いてはいないだろうか。書くことによって深くおりていくことはできる。だが、おりていっているだろうか。書くことで安心してはいないだろうか。

位置が明確になることによって、書いたものは他者への批評性をもち、他者からの批評が可能になる。「ねっ、ほら」「あっ」というのは互いに通じているのだろうか。通じてはいないのだろうか。

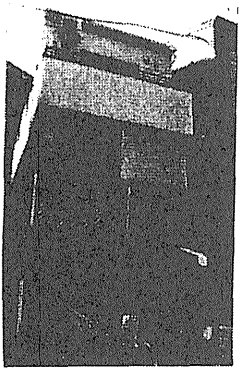
共同体としての記憶、というのは私にはよくわからない。私、私たち。社会に同時に生きていて、そこでのすりあわせなしに生きてはいない。それなら、共同体としての記憶もあるのかもしれない、とは思うのだが。

(震災・まちのアーカイブ会員)

［東尻池便り］

〝まちのアーカイブ〟喫茶アールテレビで紹介

本誌『瓦版なまず』1号で、震災一次資料を保存しているまちのアーカイブ「喫茶アール」を紹介しましたが、同店が11月4日(水)、ABCテレビ「ワイドABCDE～す」で紹介されました。番組プロデューサー高橋順氏からの「震災資料の保存をテレビで取り上げたい」との問い合わせがあり、私たちが支援する〝まちのアーカイブ〟の一つとして紹介したところ、それが電波に乗ったもの。放映された番組では店主の森山千代江さんが、保存していた地震当日に配られた缶詰などの説明をされました。



▲「喫茶アール」の外観

会員佐々木和子さん、全史料協大会で報告

11月11日～13日、沖縄で行われた「全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)」第24回大会で会員の佐々木和子さんが大会報告を行いました。「地域史料の充実をめざして――史料の保存と記録の創造」を統一テーマに3日間にわたって開催された大会のうち、2日目全体会で報告されたもの。「現代社会における地域史料保全の課題――阪神・淡路大震災が問いかけたこと」と題して、史料ネット代表幹事の奥村弘・神戸大学助教授と共同で報告されました。佐々木さんの報告は所属する「震災記念協会」の肩書によるものでしたが、報告の中では「震災・まちのアーカイブ」についても触れられたとのこと。詳しい内容については、本誌『瓦版なまず』次号で紹介の予定です。

[連載　民間アーカイブの系譜③]

ネット上の記憶？

寺田　匡宏
TERADA, masahiro

津野海太郎氏の『新・本とつきあう法――活字本から電子本まで』(中公新書、1998年)の中に興味深い記述があった。アメリカ議会図書館のウェブサイト「アメリカの記憶」についての紹介である。「歩くひとりもの」津野氏は、晶文社でブレヒトや植草甚一、ターケルの著作を手がけてきたベテラン編集者。かつて『水牛通信』なるミニコミを主宰した「ガリ版主義者」(本人はガリバニストと称している)でもあり、本というメディアのプロだ。彼の「本の未来を考える本」。その中に「アメリカの記憶」への言及があったのだ。

「電子図書館への道」と題された章では、このプロジェクトが保存のための図書館から利用のための図書館への試みだと評価し、『TIME』の一節が引用されていた。

「かんたんにダウンロードできる形に変えられたレコード(記録史料)や画像やテキスト。すなわち記憶の移植ごて。ウォルト・ホイットマンのノートブック、ハリー・フーディニのポスター、南北戦争の写真、ヴァラエティショー特集などを見ることができる。」

記憶の移植ごてとは何だろう。津野氏がわざわざ数ページを割いて言及している記憶を銘打ったサイトとは一体どんなものだろう。早速、インターネットで探してみる。検索サイト「YAHOO」でAmerican memoryと入れると、URLがすぐに出てきた(http://www.loc.gov/)。

見ると確かにおもしろい。マウスをクリックすると、色々な画像が現れてくる。

地図、写真、史料、ムービー。興味のおもむくまま、19世紀の西部の地図、1930～40年代の労働者のオーラルヒストリー(なんと彼／彼女自身の声まで聞けるのだ)、歴代大統領の演説草稿などを矢継ぎ早に見る。

見ているとあっという間に時間がたつ。「もっともっと」とつい見てしまう。1886年、テネシー州ノックスビルの古地図。クリック。1838年、シカゴ食肉工場で収録されたアフリカ系アメリカ人労働者の証言。クリック。1906年、サンフランシスコ地震の映像記録。クリック……。しかし、実は少し食傷気味でもある。海の向こうの福袋に手をつっこんで、手当たり次第に資料を引き抜いているというイメージ。一体自分は、何をしているんだろう。まさか〝記憶〟を蕩尽しているんじゃないだろうな。一方でそう思いつつ、一方で「もういいか」とパソコンの電源をプチン。

記憶について考える。その時技術の進化をどう考えればよいのだろうか。インターネット上に蓄えられた記憶。これが「アメリカの記憶」なのだろうか。これが未来の記憶のかたちだろうか。資料へのアクセスはどんどん容易になるべきだし、アメリカ議会図書館の試みは、その一例として歓迎すべきことだ。問題は、私たちの側にある。史料とどのように向き合うか、アクセスした史料をいかに「読む」か。史料のデジタル化はどんどん進んでいる。歴史学研究がそれによって大きく変わるという未来予測もある。史料を「読む」という身体行為の変化は既に兆している。その中で一体、私たちは歴史や記憶に対しどのようなまなざしを向けているのか。これは大きな問題だと思う。

民間アーカイブの「来し方」を考えるはずが、「行く末」に飛んでしまった。しかし見るべきことの何ほどを見ただろう。改めて「系譜」に戻りたい。　　震災・まちのアーカイブ会員)

■「震災・まちのアーカイブ」活動日誌

9月29日(火)全国マンション管理組合連合会事務局長・谷垣千秋氏に聞き取り取材(京都)。

10月1日(木)野田正彰氏講演会「戦争と罪責」(神戸市勤労市民会館)に、季村敏夫・範江参加。

10月9日(金)細見和之氏講演会「ホロコーストと南京大虐殺」(神戸学生青年センター)に季村敏夫参加。

10月10日(土)関西国際大学図書館・上念省三氏来所。来年開催予定の全国図書館問題研究会の大学部会近畿支部のシンポジウムについて意見交換。ひきつづき、「ひょうご福祉ネットワーク」の正津房子氏。彼女はネフローゼで入院中の故寺山修司(当時早稲田大学在学)と親交があった。個人誌『魚通信』に出版について意見交換。

11月24日(土)「検証・公費解体」に関する勉強会。寺田匡宏「芦屋市の公費解体データに関する報告」、佐々木和子「被災地クラブからの問いかけ——検証、公費解体　マンション問題を中心に」。

11月3日(火)映画「ナヌムの家」パート2上映会、細見和之氏講演会「わかるということをめぐって」(関西学院大学)に、季村敏夫・範江、寺田匡宏参加。

11月5日(木)阪神・淡路コミュニティ基金事務局次長市村浩一郎氏来所。神戸市市民局市民活動支援課井上隆文・森田拓也氏、震災しみん情報室実吉威氏来所。ボランティア支援に関するヒアリングのため。

11月12日(木)佐々木和子氏、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会大会で報告(別掲記事参照)

11月28日(土)上念省三氏、神戸大学「震災文庫」稲葉洋子氏、神戸大学図書館前田哲治・榎本氏、関西学院大学図書館水田健介氏来所。来年のシンポジウムについて打ち合わせ。

【コラム　被災地視聴草(みきさぐさ)　其の三】

最近出会った二つの事例。まず自宅再建出来たAさんのケース。今まで暮らしていた地域とは山一つ隔てた北区の仮設住宅に移った。やっと生活が落ち着いたある日、部屋に鍵をかけると、突然身体中が震え出した。地震で閉じこめられ外に出られなかった恐怖がよみがえってきたのだ。震えは、狭い部屋に入り鍵をかけたとき襲ってくる。二年あまりの暮らしの中で、力つきて亡くなっていく姿を何人か見てきた。元気そうにしていた人が、姿が見えなくなったと思うと、部屋の中で誰にも看取られずに亡くなっていた。次は自分かもしれない恐怖が常にあったという。念願かない戻ってきた家でも、突然襲ってくる地震の後遺症から逃れられない。さらにAさんは二重ローンを抱えている。おそらく再建できた何人かも、Aさんと似た苦しみを背負っていることと思う。

次に自宅再建出来ないケース。共同住宅(買取マンション)に暮らす人たちである。再建か補修か、どちらかを選択しなければならない。住民は個別事情を抱えている。にもかかわらず、充分な被災状態の調査と、それを基にした納得出来るまでの話し合いが持たれず、強引に結論を出したため、いまだ前に進めない人たち。もはや住民同士の話し合いは不可能となり、裁判で決着をつけようとしている。さらに公費解体の申請期限をきり、結論を急がせた行政に対する不信感も生まれている。このマンション問題は、過去の事例がなく、いわば近未来の住宅問題を先取りした形である。

見えにくく、内向する苦しみ。苦しみを共有し、外へ運動として表現しようとする試み。後遺症を抱えAさんは最近、支援活動を始めたという。五年間の震災復興融資特例の期限がきれると、いよいよ厳しい返済が始まる。二つの声のはざまを構造不況が襲っている。

(季村範江)

■賛助会費をありがとうございました

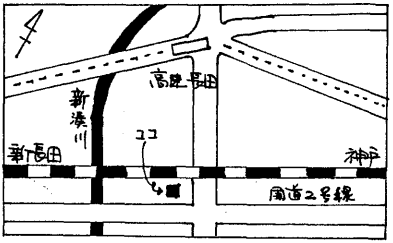
ご支援ありがとうございます。お名前を記して感謝いたします（敬称略）。

高橋実　達脇明子　三上裕

■作業用の机と椅子を探しています

ご不要になった長机やパイプ椅子はありませんか。現在、「震災・まちのアーカイブ」では、資料整理作業を行うための机と椅子が不足しております。もし、ご不要になった長机やパイプ椅子がありましたらご一報下さい。当方から取りに参ります。

■会員募集のお知らせ



「震災・まちのアーカイブ」では会員を募集しております。震災一次資料の保存に関心をお持ちの方、ぜひご参加下さい。資格は特に問いません。活動に知恵と労力を提供して下さる方を会員としています。お気軽に事務所をのぞいてみてください。

また、賛助会員も募集しております。賛助会員には、『瓦版なまず』（奇数月に発行予定）、『なまずブックレット』、『阪神大震災　さまざまな声の栞』および研究会の案内をお届けいたします。またアーカイブ所蔵の震災一次資料の閲覧、アーカイブ震災文庫の利用を行うこともできます。年会費は1口 1000 円。1口以上おさめていただいた方は、賛助会員として登録させていただきます。振り込みは、郵便振替　00920-2-125759、「震災・まちのアーカイブ」までお願いします。

【編集後記】　『瓦版なまず』3号をお届けします。奇数月に発行の予定が、わずかにずれ込み 12 月発行になってしまいました。しかし、とりあえず3号は発行。かくなる上は4号を出して「三号雑誌」と呼ばれないようになりたい……◆いつもは、編集後記を書くスペースがありませんが、今回は思いがけず大きなスペースができました。といっても逆に書くことに困りますが、とりあえず空間を埋めるため、「震災・まちのアーカイブ」ある日の日報を紹介したいと思います。「某月某日。10 時、Nさん事務所の鍵を開ける。少し遅れてメンバー三々五々来所。午前中は資料の目録カード取りと『瓦版なまず』のうちあわせ。12 時、昼休。食事を買いに菅原市場へ。ちらし寿司を購入。（ただし、「出店総菜店」コロッケ弁当 500 円にこだわる者アリ）。T氏事務所を覗きに。車で。1 時、Sさん来る。午後からも目録取り、『瓦版なまず』発送準備。3時、お茶。沖縄土産「紅芋パイ」。しばらく休憩の後、作業再開……」。隣接する〝金属分別工場〟の始業ベルに合わせて活動しています。◆さて、本号には、『阪神大震災　さまざまな声の栞』と題する、小さな冊子を添えました。約1ヶ月前、東灘区での邂逅をもとに編んだ小冊子です。栞という文字通り手の中に収まる小さな紙の集積ですが、微細な声から、一人ひとりのつぶやきから阪神大震災を考える、思考のための「うつわ」になれば、と思います。今後、随時発行してゆく予定です。『瓦版なまず』『なまずブックレット』とともにご高覧賜れば幸いです。　（T）

◇印刷協力：震災しみん情報室◇製本協力：すたあと長田

1999-spring

4

瓦版なまず

kawaraban namazu

瓦版なまず　第４号
1999年３月27日発行
編集人：寺田 匡宏
発行人：季村 範江

震災・まちのアーカイブ
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4　神港金属㈱内　Tel;078-681-6231 Fax;078-681-6232 E-mail;kioku@kh.rim.or.jp

［報告］

絆を保存する

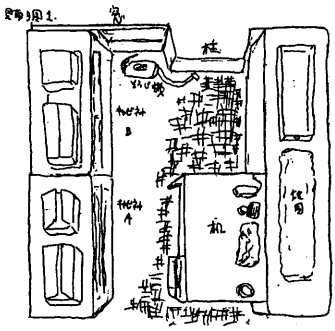
――「鷹取中学避難所資料」現地調査を始めるにあたって――

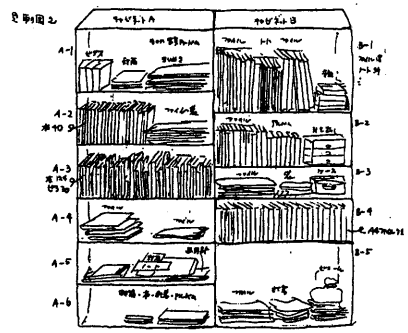
市村　登和

1999 年１月から、鷹取中学校避難所資料の目録を作成する作業を始めている。

鷹取（たかとり）。被災地が語られるとき、よく耳にする地名のひとつである。神戸市立鷹取中学校は、まさにその「鷹取地区」に位置する中学校で、かつ、この地が被災地となった直後から、須磨区最大の避難所として、被災者が暮らした。その数は、ピークとなった 1995 年２月には、3000 名を越えている。この中学校が位置する須磨区青葉町は、長田区との区境に近く、また、火災のあった長田区鷹取商店街から、西へ歩いて 10 分程のところにある。そのため、当初から、校区外の長田区からも多くの住民が避難した。そして、人情が残された町に暮らしていた外国籍の 100 人を越える人々が、鷹取中学校へ向かったのだった。それから、約８カ月の間、鷹取中学校は、中学校という本来の機能を果たしつつ、被災者の避難所として、その場所と時間を提供し続けた。

今は、中学生の学び舎に戻った校舎の２階に、その避難所資料は残されている。「コミ





鷹取中学避難所資料の現状見取り図（「鷹取中学避難所資料 現状調査報告書」より）

ュニティルーム」と名付けられた部屋で、現地整理を行い、そして、現地保存することを、私たちは予定している。

残されている資料だけで、キャビネットケース２つが、ほぼ一杯になる。おそらく、その時点で書き記した人が、保存して残しておこう、という意識しなかったものが多く含まれていることだろう。ただ残念なことに、この資料を管理してきた神生善美（しんせいよしみ）さん（避難所ボランティアグループ「ポコ ア ポコ鷹取」事務局長）によれば、衣装箱ケース何箱分かは、処分したそうだ。また、書籍など一部は、これまでに貸出しされたまま、返却されていないケースもあるという。けれども、大部分の資料は、私たちが来校した、1999 年１月までに、神生さんによって、大まかな分野別にまとめられており、その保存状態も良好であった。このように、一つの避難所資料が、まとまった形で残されていたことを、わたしたちは感謝しつつ、作業を行わねばならない。

中学校側の理解、ボランティア活動の継続、このようなつながりがあったからこそ、私達が現地保存という形で、避難所資料の保存を考えることができるのではないか、と感じている。さらに、本会員の一人が、鷹取中学校避難所で、「入浴ボランティア」として活動していたことを、ここに記しておきたい。その活動が、鷹取中学校の方々や神生さんと、私たち「震災・まちのアーカイブ」をつなげ、また、資料をもつなげた出発点なのである。

多くを失って鷹取中学へ向かった人たち。自らの意志でできることをしようと、鷹取中学へ集まってきた人たち。ここに残されている資料は、その両方を行き来した記録であり、そして、その中に、記録では表されていない絆が、幾重にも織り込まれている。その絆をも残しておくためにも、この資料は、「鷹取中学コミュニティルーム」に、残されていなければならないものであろう。少なくとも、私たちが保存をするために、その絆を断ち切ってしまうことはできない。また、例えば、中学校の学習資料として、あるいは、ボランティアとして活動した参加証明として、今も使われることがあるこれらの資料は、まだ過去の文書（もんじょ）となってはいない。避難所はすでに解散していても、資料は、今も活きて、静かにつながりを待っている。その息づかいを、私たちは感じながら、整理を進めていきたい、と思っている。

（震災・まちのアーカイブ会員）

◆現在、神戸市立鷹取中学で、同校の避難所資料の現地整理を行っています。これは、本文でも述べられているとおり、当会のメンバーの一人が震災当初、鷹取中学でボランティアに携わっていた縁からのもの。鷹取中学では、残された避難所資料をコミュニティルームという地域に開かれた教室に保存していました。質量共に第１級のこの資料を、現地で保存して行くためのお手伝い、まちのアーカイブづくりの支援として、目録取りの作業をはじめています。◆とりあえず、現状を把握し、現秩序を尊重しながら概要の目録を取り始めています。これから、より詳細な内容目録、構造分析を行う予定です。現在、月１回、木曜日の午後から作業を行っています。誰でもできる作業です。ご興味のある方は是非一度ご参加下さい。

［報告］

資料の〝ぬくもり〟とは何か

――「震災・まちのアーカイブ」この一年を振り返って――

寺田　匡宏

今年の1月、大学図書館問題研究会という集まりで、私たちのグループの取り組みについて報告する機会があった。そのとき与えられたテーマが、「資料／史料のぬくもりについて」。当日は、力不足からこのテーマに十分に答えることができなかった。それ以来、このことばがずっと心の中にある。

この3月で「震災・まちのアーカイブ」が神戸市長田区東尻池の地に誕生してから一年がたった。この一年の活動を振り返ることで「ぬくもり」を考える手がかりをえられないか。二度目の春を機会にこのことを考えてみたい。

昨年一年間、私たちは、おおむね次の三つの柱に沿って活動してきた。

①震災一次資料を整理する

②まちの中にアーカイブをつくる

③震災一次資料を残す意味を考える

当初の私たちの思いは、資料の整理にあった。「震災・活動記録室」から引き継いだ膨大な資料。これを整理公開しようというのが昨年3月に集まったメンバーの共通した思いだった。しかし、活動を始めてみると、それだけでおさまらない課題が見えてきた。資料とは人と人のつながりを通じて保存される。だとするなら、まちの中にアーカイブをつくる活動が必要ではないか。二番目の柱が、活動を始める中で明確になった。

そして、三番目の震災一次資料を残す意味を考えるという柱。震災の記録と記憶の意味を、被災地のみならず、普遍的なものとして考えたい。『瓦版なまず』『なまずブックレット』『阪神大震災　さまざまな声の栞』などを発行することを通じて追究しようとした。小さなメディアによる発信を試みたのである。

昨年の活動は以上のようにまとめることができる。しかし、こうまとめてしまうと何か抜け落ちてしまう気がする。それは、これらの活動を通じて常に自問してきた、一体私たちは何をしようとしているのかという問いである。

思えば、昨年一年を通じて、様々な震災の現場と取り組む人と出会った。長田・御蔵の地で識字やまちづくりなど地道なボランティア活動に取り組む人々、被災マンション問題に取り組み闘っている人々、震災を建築の問題から考えようとしている建築家、震災で被害を受けた下町を写真で記録している写真家、そして日々地道に歩き取材を続ける報道に携わる人々。この人々との出会いの中で、私たちは、常に問われていることを自覚してきたのである。いったい、私たちは何をしようとしているのか、と。

記録とは、本来とても厳しい営為であろう。資料も、同様に様々な人々の色々な思いが染みついたとても重い存在だろう。私たちは、そういうものと向き合っている。様々な出会いの中でこのことに気付く。

一方、資料とは、ぬくもりの中で保存されることも見えてきた。人がその資料を残したいという思い。資料の中にこめられたかすかな声。これらをどうすくい取るのか。私たちはこの課題にも向き合っている。

私たちが行おうとしている震災一次資料の保存とは、その二つの課題に同時に向き合うことなのだと思う。ぬくもりを求めながら、記録という厳しい営為に立ち向かうこと。一年を終えて、私たちが行うべきことが少しずつ見えてきたような気がしている。

（震災・まちのアーカイブ会員）

［メモ］

家のこと(1999. 2. 11)

木内　寛子

●家を選んだことはない。家はあった。

●地震のとき、揺れた。きしむ音を聞いた。漠然と生き埋めってこういうふうにしてなるのかしらと思っていた。揺れがおさまり、夜が明け、壁が落ちているのを見た。戸は開いて、しまらなくなっていた。まあ、住めるからいいや、と思った。

すきま風が寒いだろうと外用のジャケットを着た。ゴミ袋とガムテープで風と雨を防ぐことを考えた。

●私が家をつくるとしたら、と考えたことがある。そのとき浮かんできたのは、穴を掘って、口は草か何かでふさぐ、というものだった。

●地震後、河原や空き地にテントやビニールシートの家が現れた。むくむくと生き物のようだった。木があれば鳥が棲み、草があれば虫が棲み、と同様のものに思われた。家は、人の生に密着した、自分の手でつくれる簡素なものだと思った。

●家の改修で外壁を落とすとき、私は家の中にいた。凄まじさを感じさせる音が耳許に響いていた。外骨格をはがされる虫のように小さく身を縮めていた。

●猫が庭をゆうゆうと横切っている。玄関を出ると猫がすわっている。互いに黙礼をかわす。私の土地と囲っても、お金を出して買っても、それは人間の間のとりきめに過ぎないと猫を見ていて思う。

●宮沢賢治に『狼森と笊森、盗森』という作品がある。４人の百姓がおかみさんや子どもたちと新しい土地にやってきて、まわりの森に「ここへ畑おこしてもいいかあ」「ここに家たててもいいかあ」「ここで火たいてもいいかあ」「少し木もらってもいいかあ」とひとつひとつ尋ね、「いいぞお」と森の返事を聞いてはじめて、その土地に家を建てるのである。そういうやり方があったのだ、あったのだろうと得心させるものがある。

●今、私にとって、生活、この家は何だろう。箱？　寝るところ？　時間と空間があちらこちらにばらばらにあって、下宿人のような感じで生活している。落ちつく所ではあるが、私はこの家で暮らしているのだろうか、住んでいるのだろうか、という思いがある。

（震災・まちのアーカイブ会員）

【おしらせ】「震災・まちのアーカイブ」では会員を募集しております。震災一次資料の保存に関心をお持ちの方、ぜひご参加下さい。資格は特に問いません。活動に知恵と労力を提供して下さる方を会員としています。お気軽に事務所をのぞいてみてください。
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 神港金属㈱内　高速長田駅下車南へ徒歩８分です

［覚え］

一冊の帳面と一枚の紙片から

藤原　直子

資料の整理をしていると、「え、これも資料になるの？」と思われる様なものに行き当たる事がある。何も書かれていない紙片や、空箱、表紙だけのレポート用紙など、私には、何の変哲もない物に映って、なかなか資料として残しておくべき物とは思えない。そういう物が出てくる度、「資料になるのかどうか」と問う私に、「それも、資料になりますよ」と、メンバーの一人はきっぱりと答えてくれる。

忘れられない一冊の帳面がある。震災の年の三月のこと。神戸の街で、マンションの焼け跡からこぼれ落ちていた、一冊の帳面に目が止まった。路上に投げ出された帳面のマス目には、幼い文字が踊っていた。いったい、いつからここにあるのだろう。幼い文字の持ち主は、今どうしているのだろう。私の心は揺れた。

もうひとつ、私の大切にしている物の中に、一枚の紙片がある。六年前に逝った姉が、入院中に私に宛てて書いたメモ。外出できない自分に変わって、私にしてくれるようにと頼んだ用事が、いくつか書きつけてある。私は、そのメモを見ると、今でも、その用事を頼まれているような錯覚に捕らわれる。まるで、姉と私の永遠のやりとりのように。

一冊の帳面と、姉と私との私的なメモ。どちらも、日々の暮らしの中では、何気なくやりとりされている物に過ぎなかった。それが、何かの拍子に思いがけぬ意味を持ち始め、私の心を揺るがせる。

そんな思いをめぐらせていると、知人がこんな話をしてくれた。勤め先の会社に国税局の調査が入った折、調査員は決算として提出した書類の他に、社員が日常、書き残したメモを、より熱心に捜し、読み取ろうとしていたという。提出が義務づけられた書類の中では聞こえてこない、日常業務の中の事実の声を聞こうとしていたのではなかったのか。

もし、こうして神戸の街で目にした帳面のことを思い起こして書き留める事がなければ、又、姉と交わしたメモを残しておかなければ、この事は、いつの日か、私の記憶から消えていたのかもしれない。しかし、こうした暮らしの中にひそむ、ささやかな事実が私の心を揺るがせる。その事実の重なりの中にある大切なものが、私を人として生かし、豊かにもしているのだと思う。震災にあった街に眠る、そうした物を少しずつでも掘り起こすことができたらと、私は願っている。

（震災・まちのアーカイブ　会員）

【おしらせ】震災・まちのアーカイブでは、賛助会員を募集しております。賛助会員には、『瓦版なまず』（季刊）、『なまずブックレット』、『阪神大震災　さまざまな声の栞』および研究会の案内をお届けします。また所蔵資料を利用していただくこともできます。年会費は1口 1000円。1口以上おさめていただいた方は、賛助会員として登録させていただきます。振り込みは、郵便振替　00920-2-125759、「震災・まちのアーカイブ」までお願いします。

る。ただ記録すること、それのみによって、他のことは為さぬ。しかし彼は、記録によって、あらゆることを為すのである。歴史家は、為さざること無し、でなければならぬ。何故ならば、彼は万物の情を究め、万物の主となるのであるから。歴史家の「無為自然」は記録である。彼自身による記録である。彼は、彼自身による、きびしき記録のために、無為自然のままに書かねばならぬ。それによって、あらゆる事をなすがために。】

傍点著者・武田泰淳『司馬遷、史記の世界』

註

●北島（ペイ・タオ）一九四九年北京生まれ。天安門事件以降、国外脱出。ここ数年ノーベル文学賞候補にあがっている。

世界よ、きみに告ぐ
わたしは信じない！
たとえ戦いを挑んだ一千の者たちをお前の足下に踏みしだいていようと
わたしが一千一人目となろう
わたしは信じない、空が青いなどと

作品「回答」より

●芒克（マン・クウ）一九五〇年生まれ。北京在住。詩集『時間のない時間』ほか。

地面にはや生え出た死者の白い髪
それがわたしに信じさせる、ひとは死して
なお老いさらばえることがある
ひとは死してなお悪夢に襲われることがある
そしてうつろいめざめ、まのあたりにそれを見る

作品「死してなお老いさらばえることがある」より

●文芸雑誌『今天 Today』一九七八年北島、芒克らにより創刊。一九八〇年発禁処分。なお、映画監督陳凱歌は、小説を発表していた。

●下放政策に関して、陳凱歌は、こう述べている。

【正式には「知識人が山に登り村へ下る」と当局が呼んだこの運動は、晩年の毛沢東にとって最後の壮挙だった。（中略）運動のより現実的な要因は、すでに使命を終えた紅衛兵が、情熱をなくした大量のさまよえる若者となって、都会でぶらぶらしていたことだ。毛から見れば、彼らの存在は再構築された秩序にとって、危険すぎたのだ。（中略）彼らは都会の戸籍を強制的に抹消され、永久追放と同じ処分にあった。学生たちが向かった場所、それは中国で最も辺鄙な、そして最も貧しい地区だった。】

『私の紅衛兵時代』（講談社現代新書）

（震災・まちのアーカイブ　会員）

あの震災はなんであるのか。何度もおもい起こすこと。深く想起すること。

震災の記憶を考える３部作

季村敏夫・編

石牟礼道子・岡田哲也・季村敏夫『死なんとぞ、遠い草の光に――水俣、ショアー、阪神大震災のことなど』震災・活動記録室、1996年、500円（送料180円）

笠原芳光・季村敏夫（編）『生者と死者のほとり――阪神大震災・記憶のための試み』人文書院、1997年、1900円（送料310円）

季村敏夫『エチカ・震災精神史への試み――家族の崩壊、国家の崩壊』震災・まちのアーカイブ、1998年、300円（送料140円）

●震災・まちのアーカイブで販売中　●購入希望の方は代金と送料を振り込んで下さい
振込先：郵便振替　00920-2-125759　震災・まちのアーカイブ
●ご注文の種類によって送料が異なります。ご注意下さい。
『死なんとぞ』＋『生者と』310円、『エチカ』＋『生者と』310円、『死なんとぞ』＋『エチカ』210円、『死なんとぞ』＋『生者と』＋『エチカ』340円

再び、記憶、記録に関して

季村　敏夫

物事は、実際に自分の身に降りかからなければ、それを理解はできないだろう。

陳凱歌

中国文学者の浅見洋二氏から伺った話が、いまも胸のなかに、ずしんと残っている。

中国の詩人、北島、芒克を招いて朗読会があるというので、旧臘私は大阪まで出掛けることにした。その日、西天満の会場に予定より早く到着してしまったので、どちらが誘うともなく、浅見氏と私は、向かいの蕎麦屋の暖簾をくぐった。

北島や芒克らが創刊した文芸雑誌『今天』に参加した詩人以外に、ほかにどのような方が活躍しているのでしょうか。

門外漢の質問に対する氏の明快な応答が、その後私の胸に深く刻みこまれることになった。

ほとんどいないのではないでしょうか。『今天』に拠った詩人たちは、下放からの奇跡的な生還者で、文学を志した文化大革命当時の若き俊英たちのほとんどは地上に生存していないということです。獄死、自殺、発狂。狂熱のさなかで、すでに息絶え、闇深く葬られたいのちの如何に多かったことか。

一瞬私は、ビールの入っていたコップをテーブルに置き放った。

表現とはやはり、広大無辺な沈黙の、ほんの一部を担う営みなのか。紅衛兵と同じ時代を駆け巡っていた私なぞ、このことは痛いほど身体で了解できた。生き残る者のエチカが、もしも成立するとしたなら、亡くなった者への畏怖のなかにしか求めようがない。死者を畏れつづけながら、彼らの息づかいをたとえ一部でよい、しっかりと掬いつづけること。それはいわば、沈黙の彼方から命じられる代理行為なのだが、そのとき私は、「ふるえ」の強度に襲われていた。強度は、死者の沈黙からもたらされていた。私は、テーブルに置かれた褐色の液体に見つめられながら、浅見氏の繰りだす言葉を受けとめていた。

うぶ声をあげ、やっと一年を迎えるわが「アーカイブ」のつながりのなかで、私はいつも、言葉や映像でとらえられた記録より、記憶の方が大切であると主張してきた。記録や記録の収集を自明の前提にしてはならないと言いそえてきた。書かれたもの、表現されたものより、いまだ書かれざるもの、表現不能のものを優位に置くべきだと訴えてきた。私たちの表現への歩みが、泉下に眠る者の息づかいに支えられ、またその息づかいを、ある意味で踏みにじることによりなされること。私たちの出自が、この侵犯へのおののきにあることを、今後も深く肝に命じておいた方がよい。

かけがえのない子どもを亡くしたあと、誰にも行き先を告げずに神戸を立ち去った母親の背姿。ご近所の誰ひとり行き先は不明だという。しかも私にとって、他者から聞いてきた話に過ぎない。そのことを別方向から噛みしめるため、やはり中国文学者の引用で拙文を終えることにする。

【行為せぬものが、又あらゆる行為をする。これは、矛盾した言葉のようにも見える。しかし、この言葉の暗示するところは、案外深いのではないか。「歴史家は無為である。又為さざること無し、とも言える」と書き改めて見よう。歴史家はただ、記録するのみであ

[書評]

家という夢が壊れたあと

――島本慈子『倒壊』を読んで――

季村　範江

阪神大震災に関する書物は数多く出版されたが、そのなかでも『倒壊』は、住宅ローン問題を真正面から取り上げることにより、日本の住宅政策の構造的な歪みを見事に描いている。著者の島本さんは、被災地を徹底して歩き通した。被災者、銀行関係者、各種自治体に係わる人。たったひとりで、多方面の取材を実行した。その都度、丹念な聞き取りをしながら、戦後の住宅政策の中に、何が隠されていたのか、制度の何が破綻していたのかを具体的な事例をあげ説き明かしていった。

かつて島本さんは、月刊誌の編集者として、読者から投稿された家計簿を掲載する仕事を担当していた。読者の共通する夢は、「自分の家を持つこと」だった。1960年代になり、住宅ローンが普及し、家を持つことが豊かさの証明のようになった。若い世代でも家への夢が身近に持てるようになった。そのため、家計を節約し、苦心し、工夫している様子が、それぞれの家計簿に生き生きと描かれていた。

震災で多くの家が壊れ、そして焼け、家や家財道具を失っただけでなく、住宅ローンという重荷を背負ってしまった人々が、被災地に生まれた。その人たちと投稿してきた読者たちとが、島本さんには重なって見えた。家を持つために涙ぐましい努力をしていた人々の夢と生活は、いったい何だったのか。

家を失ったのに、住宅ローンという債務だけが残った家庭の数は、どの位あるのか。地震から3年たって、筆者はひとりで調査を始めた。被害の数は、どこにも出ていなかった。解体された家の数は14万5千戸。そのうち、住宅ローンが残っているのは1万5千人。こう島本さんは推定する。壊さなくてすんだ家も解体された。「公費解体」への疑問も、ここで鋭く投げかけられている。

理不尽な問題に苦しむ人々に、救済の方策は取られたのだろうか。残ったローンの返済は最長5年の延長がきく。自宅を再建し、ダブルローンを背負う人には、低利融資がある。だがどちらも無理な人は自己破産するしか方策がない。ローンが払えず自己破産を余儀なくされた人。このさき何十年も共働きをしながらダブルローンを払っていかなければならない夫婦。再建出来ず自殺に追いこまれた人など、生きがいだったはずの家への夢が一転して重い荷物となった実例を、筆者はいくつも伝えている。

マンションの問題も取り上げている。補修か建て替えか。住民の5分の4の同意で、建て替えが決議され、新たにローンが組めず、持ち家を手放さなければならなかった人。十分な調査と話し合いが持たれずに決議されたため、「建て替え決議無効確認」の訴訟を起

こし、未だに震災当時の姿をさらしているマンションもある。

阪神大震災は、日本に住宅ローンが普及されはじめ、ローンが特に集中している大都市で起きた災害で、過去に事例のない問題を突き付けている。持ち家政策を推奨した政府に責任はないのか。制度に欠陥はなかったのか。家さえ持てば、幸せになれると夢を売り続けた建設業界の姿勢は問われないのか。スクラップ・アンド・ビルドという経済至上主義を推し進めてきた戦後の私たち自身の責任は。生き方の姿勢は。次から次と疑問符がつきあげてくる。この著作で示されている事実は、現在日本で暮らしている私たちに、いつふりかかるかわからない問題ばかりである。家という夢が壊れたあと、住宅ローンが残った。夢が醒めたあとでないと、ほんものに、本当の道に戻れないと言わんばかりに。

「だが、私たちはゲーム・オーバーにはさせない。」ダブルローンを抱えて、懸命に生きている若い夫婦が訴えかけているこの言葉は、被災地をこえ、私たちに重く響いてくる。

（震災・まちのアーカイブ会員）

※島本滋子『倒壊――大震災で住宅ローンはどうなったか』筑摩書房、1998年、1800円。

民間アーカイブの系譜④

「コルシア書店」

今年の冬、私たちの間で須賀敦子がはやった。

須賀敦子とは誰か。『ミラノ　霧の風景』（白水社）の作者。『ユルスナールの靴』（河出文庫）の著者。あるいは、『遠い朝の本たち』（筑摩書房）の書き手。彼女の文体に一度触れたものは、その文章の力に魅了され次々とその著書をひもとくことになる。どの本も印象的だが、とりわけ『コルシア書店の仲間たち』（文春文庫）は心に残る。

須賀敦子は、1958年から1971年、二十代のおわりから四十代のはじめをイタリアで暮らした。その生活の中心を占めたのは、夫の勤める書店であり、そこに出入りする様々な人々との交流が彼女の人生に消し去ることのない軌跡を残した。『コルシア書店の仲間たち』はその時期の記憶をたどった本である。

コルシア書店とは何か。当時イタリアのカトリック教会では、教会を現代社会に組み入れようとする運動が現れていた。そのカトリック左派のミラノにおける中心がコルシア書店である。そこには運動のリーダーがいて、彼らの著書が発行され、本をめぐって人々が集まっていた。

「コルシア・デイ・セルヴィ書店の周囲には、これを支える大きな友人の輪があった。夕方六時をすぎるころから、一日の仕事を終えた人たちが、次々に書店にやってきた。作家、詩人、新聞記者、弁護士、大学や高校の教師、聖職者。……書店のせまい入口の通路が、人をかきわけるようにしないと奥に行けないほど、混みあう日もあった。」

なぜ、彼らはコルシア書店に足を運んだのか。コルシア書店に集った誰もが「あたまのなかでは、つねにどこかで共同体を考えていた」。本を通じた共同体というものが可能であると考えられていた時代と場所。書店を通じた共同体が構想され、色々な人々が熱っぽく集まっていた。

『コルシア書店の仲間たち』は、本を通じた共同体は可能かという問いを投げかけている。私たちにとって本とは何か。私たちは胸の中にそれぞれの「コルシア書店」を持ちうるだろうか。記憶の一つのあり方を鮮やかに形にした本書を読んでそういうことを考えた。

（寺田匡宏）

■「震災・まちのアーカイブ」活動日誌

(1998年12月～1999年3月)

1998年

12月6日(土)季村範江、野田高校避難所「同窓会」に出席。震災一次資料の保存を訴える。

12月17日(木)午前、朝日新聞記者・角谷陽子氏来所。『阪神大震災 さまざまな声の栞①』に関する取材のため。午後、神戸市立鷹取中学避難所資料現地調査のための下見。ボランティアグループ「ポコ ア ポコ鷹取」神生善美氏より説明を受ける。

1999年

1月16日(土)午前、東京よりウラベノリコ氏来所。午後、大学図書館問題研究会のための準備会。

1月23日(土)寺田匡宏、大学図書館問題研究会近畿4支部合同例会にて報告。「資料保存にぬくもりを求めて——震災・まちのアーカイブの経験から」。この日の統一タイトルは、「震災をどう記録／記憶するのか」。神戸大学付属図書館「震災文庫」の稲葉洋子氏の報告も行われた。例会後、佐々木和子の案内でフェニックスプラザの震災資料展を見学。

1月21日(木)鷹取中学避難所資料現地整理。野間富士夫校長に挨拶。資料の現状記録を行う。神生善美氏同席。

1月25日(月)寺田匡宏、トヨタ財団(東京都新宿区)渡辺元氏を訪問。活動について説明。その後、住民図書館(東京都中野区)、谷根千(谷中・根津・千駄木)、模索舎(東京都新宿区)を歩く。

2月4日(木)尼崎市立地域研究史料館調査員・菅祥明氏来所。活動状況について説明。

2月18日(木)阪神・淡路コミュニティ基金和田稔邦氏来所。資料整理の進捗状況について説明。

3月4日(木)神戸市立鷹取中学にて資料の現地整理。神生善美氏同席。

3月18日(木)神戸市立鷹取中学にて資料の現地整理。神生善美氏同席。

■カンパ・賛助会費をありがとうございました(1998年12月～1999年3月、敬称略)

今枝一夫、エノモトカズヨシ、大門正克、河合房子、北原糸子、神戸新聞情報科学研究所
貞丸節子、菅祥明、すみとも正成、達脇明子、富善一敏、筒井耕三、ナカタナリシゲ
ミナミユタカ、安水稔和、若原キヌコ、大学図書館問題研究会近畿4支部合同例会参加の皆様

■「震災・まちのアーカイブ」総会のお知らせ

年次総会を開催します。日時は1999年4月3日(土)14時～17時、場所は震災・まちのアーカイブ事務所の予定です。1998年度の総括と1999年度の活動方針について話し合う予定です。会員・賛助会員の方は是非ご参加下さい。なお、総会終了後、懇親会(ベトナム料理)も予定しております。

【編集後記】先号で3号雑誌にしたくないと申しましたが、危うくそうなる危機。息切れを防ぐため、本号から季刊とします。ご了承下さい。ということで、次号、夏にお目にかかりましょう。 (T)

◇印刷協力：震災しみん情報室◇製本協力：すたあと長田

1999-summer

5

kawaraban namazu

瓦版なまず　第5号
1999年7月18日発行
編集人：寺田 匡宏
発行人：季村 範江

震災・まちのアーカイブ
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4　神港金属㈱内　Tel:078-681-6231 Fax:078-681-6232 E-mail:kioku@kh.rim.or.jp

【ノート】

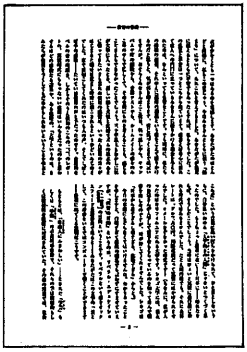
内省と祈り

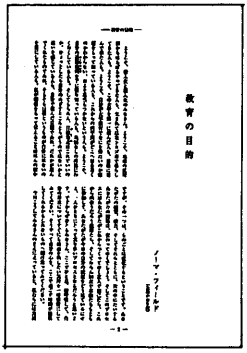
震災・まちのアーカイブ、「阪神大震災・記憶のための場所」(仮)に向けて

寺田 匡宏

現在、震災・まちのアーカイブでは、今秋事務所を「阪神大震災・記憶のための場所」(仮)として公開する準備を進めている。一次資料の整理と保存措置、目録の整備、図書の購入、ビデオのダビングなどの作業を行い、まちの資料館として、資料を閲覧できる場所をつくることを目指している。しかし、資料の閲覧だけでよいのか。神戸では、半年後に震災5周年を控え、震災の検証、震災のコメモレイションの動きがあわただしい。その中で、私たちはどのような場所をもつことを目指せばよいのか。私たちは、まちの中にアーカイブを持つことを目標として活動してきた。その中である場所を拠点としてもつとはどのような意味を持つのか。準備の中で考えていることを整理してみたい。

雑誌『みすず』の3月号にノーマ・フィールドが「教育の目的」と題する一文を寄せている。『天皇の逝く国で』の著者であり、シカゴ大学で日本文学を講じる彼女が、大学の新入生に向かって贈った講話がもとになった





ノーマ・フィールド「教育の目的」『みすず』456、1999年3月

文章である。

新たな生活をはじめる不安と期待に満ちた若者に向き合っている彼女は、大学で学ぶとはどんなことかを語りかける。つまり、学習が何かの手段ではなく、人間性そのものの肯定の行為だということに気付くこと。自分が何者かを見つめ、さまざまな社会関係の中にある自分を発見すること。あなたしか知らないものの見方に自覚的であること。そして、そのことの意味を教え、あなた方の全存在に生気を吹き込む愛を発見し掴みとる経験をもつこと。

話の中で彼女は、大学のキャンパスについても述べる。この大学のキャンパスは、中世の建築物にならった一連の建物が方形の中庭をかこんで、顔を内側に向けている。私はこれを肯定的に受けとめたい。つまり、建物は内省的であれということを示している。勉強の目標とそこへ向かう過程のもつコンテクストの両方をつねに視野に入れること。複眼をもって学習の意味を常に問うこと。その過程をあなた方の学習の一部として学んでほしい。

静謐に自己と向き合うための場。頭の中で北米の大学のキャンパスのたたずまいを想像していて、ふと祈りの場が頭に浮かんだ。修道院や教会の、回廊やカテドラルの形態は、自己と向き合う場としての要件から生み出されたかたちなのではないだろうか。

では、そのような場を作ったのは誰だったのか。祈りのための場は、多くの人の浄財によって作られるものだろう。なぜ彼らは、そこに自らの財貨を投じるのか。それは、祈りの場が、一人の力では作り上げることのできない空間だからではないか。静謐な場、人がそこにゆけば自己と対話できる空気を作り出す空間。そのような崇高な空間は、人と人が支えあうことによってしか作り上げることができないのではないか。

一人ひとりが自分の内面に向き合うことのできる場所とは、決して個人の力によって作られるのではない。多くの人々の志によって支えられた公共の空間として作られなければならない。ノーマ・フィールドの一文を読んでいて、そのようなことに思いが至った。

私たちが神戸で持とうとしている場所は、どのような場なのだろうか。私たちが目指そうとしている空間とは、どのような空間なのか。震災に関わる資料をアーカイブとして残すことは、単に図書や一次資料を収集保存することだけではない。震災の資料は人と人のつながりの中で保存される。この場に生きる人々の声に耳を傾けること、そしてその声と向き合う中で自分が日々変わってゆくこと。震災を記憶し続けるとは、そのような過程のことなのだと思う。

私たちは、倒壊した会社社屋の跡地に急遽建てられたプレハブをご厚意でお借りして活動を続けている。そこは決して伽藍ではない。しかし、私たちはその場所に、祈りの場をつくるのと変わらぬ思いを込めなければならないと思う。

この場所は、多くの方々の志に支えられている。つまり、それはさまざまな出会いに開かれている場であるということだ。そのような場で、同時に深く自己を見つめることはどうすれば可能なのだろうか。一人一人が内面と向き合う場こそが、公共性をもつ。そのような空間を持つことができないかと考えている。

（震災・まちのアーカイブ会員）

■現在、震災・まちのアーカイブでは事務所を「阪神大震災・記憶のための場所」（仮）として公開するため、資料の整理作業をつづけています。震災一次資料や、図書の整理、パソコン入力などにご関心をお持ちの方、是非ご参加下さい。

【声】

集まって人が住むということ ①

―ある被災マンションの再建―

佐々木 和子

「原告の請求を棄却する」、神戸地裁第101号法廷で、裁判長の声が響く。1999年6月21日、グランドパレス高羽(神戸市灘区)の「建て替え決議無効確認訴訟」に判決がくだされ、建て替えが認められた。

被災マンションの建て替えをめぐる争いに、初めての司法判断である。「建て替えの合意形成にむかう手続きに納得いかない」、「補修をすれば十分住める」と、原告側は主張した。

約1年前、グランドパレス高羽の集会室で、原告である「被災地クラブ」の人たちに出会った。「建て替えか補修か」をめぐる住民間の意見の対立とそこに至る経緯が語られた。区分所有法、被災マンション法、民法、あるいは建物の構造など、マンションの建て替えに関わる多くの法律や実態など、矢継ぎ早に説明をうける。そして、「公費解体の期限が無言の圧力になった」、「公的支援が解体・建て替えに偏っていた」こともここで初めて知った。

分譲マンションは、人が集まって住む器。土地や建物を見知らぬ人たちが共同で所有し、管理する。突如襲った地震からの立ち直りも、多数の人たちが話し合い、一つの方法を選ぶしかない。しかし、そこに住む人たちは、さまざまな異なる事情をかかえていた。「見えない地中の杭や柱の被害状況は」、「安全性はどこまで回復するのか」、「補修費用と建て替え費用の比較は」といったことには、専門的知識を必要とする。しかも緊急にその対応に迫られる。この時こそ、第三者であり、法律、建築、金融といった専門家を組織する力をもつ機関が求められる。今回この役割を果たすべき行政が、建て替え主導であったことが、不幸の一つであった。

被災マンションで初判断
「多数住民の意思尊重」

私ならどんな判断をしただろう。一時期家が欲しくて、このあたりのマンションの広告を一生懸命みていた頃を思い出す。安心して住み続けられる住まいが欲しかった。決して安くない家賃を思うと、それならと考えた。ローンの計算をしては、高嶺の花とため息をもらした。

「資産価値を高めるためなんかじゃない。私たちだって安全に暮らしたいだけ」。判決の日、傍聴席で建て替え派と思われる人たちの声が聞こえてきた。地震から4年半の歳月は、住民同士の間に修復不可能な亀裂をもたらした。ボタンのかけ違いはどこでおこったのか。法律判断だけにまかせずに、「人が住む」という視点からの検証が求められる。

判決後、原告側は大阪高裁に控訴し、さらに上級の司法判断をあおぐことになった。震災後、「復旧でなく、創造的復興を」という言葉がしきりにいわれた。復興を急ぐあまり、六甲山の麓には、まだ復旧工事さえはじまっていないマンションがある。　(つづく)

(震災・まちのアーカイブ会員)

【便り】

ヒマラヤからの贈り物

季村 範江

ネパールの首都カトマンズから、車にゆられて五日間、国境を越えヒマラヤ山脈を越えはるかチベットのラサを目指す旅をした。行程 1000 キロ、5000 Mの峠をいくつも越え、悪路と高山病に悩まされ、自分の限界をいやという程知らされた旅だった。高度 3000 M を越えると、空気中の酸素の濃度は平地の約 2/3 に、5000 Mでは約 1/2 になるといわれている。高山病は体内に送り込まれる酸素の不足から起こるもので、症状としては頭痛、吐き気、不眠、倦怠感、悪寒等。さらにひどくなると肺水腫を起こし、まれに命を落とす人もいるという。

高度を少しずつ上げていくなら、人間の体は順応出来るが、車で一日に 1000 M近く上がると体は適応出来なくなる。出発して二日目、3700 Mあたりから仲間の数名が具合が悪くなる。私も頭痛と吐き気に悩まされ眠れない。酸素不足から動作も緩慢、思考は停止状態。関心事といえば、自分の健康状態のみ。日毎に弱っていく体力と気力。もうダメと思ったら本当にダメになってしまう。いくら気力をふりしぼっても、体力がついてこなければ体は思うように動かない。朦朧とした意識で見る風景は、圧倒的なスケールでどこまでも続く荒涼とした山、山、山。澄んだ青空に浮かぶ真っ白な雲。5000 Mの峠には、風にはためくタルチョといわれる経文を書いた旗。このすごい光景は苦しんではじめて出会うことが出来たのだった。

しかしこのような高所にも、村があり、ヤクや羊を放牧し、人々が生活しているのは驚きだった。5000 Mの峠で車を止めると、どこからか村人がやってきて人懐つこい笑顔で迎えてくれる。人と人とのつながりがとても近いと感じさせてくれた。

五日目、最後のカロ峠を越え、車がラサに一気に向かってゆく時だった。徐々に下がる高度とともに、少しずつ鮮明になる意識の中で、車窓にひろがるヒマラヤの山々を見ながら、不意に思った。この旅が自分の力で出来たのではない。何か大きなものに守られここまで来ることができ、そして今ここにいるという実感だった。気が付くと涙があとからあとから流れていた。

思い返してみると、日頃の自分をとりまくものから切り離され、むきだしの自分が自然と向き合う旅だった。高山病の辛さは、経験してみないと分からない。その苦しさはひとりひとりのもので、誰も代わることが出来ないものであった。だから旅とともに同じ苦しさを体験したもの同志の連帯感のようなものが生まれていた。苦しい時、人の何気ないやさしさが、どんなに自分の力になったことか。厳しい自然を前に、人はひとりでは生きてゆけないということを再確認した旅だった。この体験は、地震の後感じた思いとよく似ていた。忘れていたあの時の感覚を、よみがえらせてくれた旅でもあった。

（震災・まちのアーカイブ会員）

石牟礼道子・岡田哲也・季村敏夫　好評発売中
『死なんとぞ、遠い草の光に――水俣、ショアー、阪神大震災のことなど』500(送 180)円

【つぶやき】

『1941年。パリの尋ね人』からのメモ

木内 寛子

＜パリ 尋ね人。ドラ・ブリュデール。15歳、1m55、うりざね顔、目の色マロングレー、グレーのスポーツコート、ワインレッドのセーター、ネイヴィーブルーのスカートと帽子、マロンのスポーツシューズ。パリ、オルナノ大通り 41 番地、ブリュデール夫妻宛情報提供されたし。＞

モディアノは偶然目にした、1941.12.31 付パリ・ソワール紙の尋ね人広告が心から離れなくなり、尋ね人の少女ドラ・ブリュデールに関する事実をさがしはじめる。

この作品はフィクションではない。だが、奇妙な読後感だった。私に、ドラと著者モディアノが渾然となってしまい、あのひとつの時代、占領下のパリをモディアノが生きているように錯覚してしまうのだ。(1940 年、フランス、ナチスドイツに降伏。モディアノ、1945 年生)。

モディアノが探し出せたドラに関するもの、出生証書、従姉妹の子どものころの思い出、数枚の写真、聖マリア学院寄宿舎名簿、クリニャンクール地区警察署記録簿、マドモワゼル・サロモン宛メモ、レ・トゥール拘禁所記録簿、ドランシー収容所カード。

ドラは 1941 年 12 月 14 日(日)聖マリア学院寄宿舎を脱走。1942 年 6 月 19 日レ・トゥール拘禁所入所、ドランシー収容所を経て、1943 年 2 月 21 日アウシュヴィッツ収容所に送られる。反抗的性格だったという。

モディアノはドラについての小さな事実に精神を集中して、彼女を浮かびあがらせようとする。……だったのだ、……であるにちがいない。彼自身の記憶を流しこんでいく。同時に、彼の空白の占領下のパリへドラが(ドラをとおして彼が)流れこんでいく。例えばパリという土地、例えばそのオルナノ大通り、歩いていた。寄宿舎からの脱走。彼の父親はドラ同様ユダヤ人として占領下のパリに追われていた(ドラの場合は両親からの捜索願と二重だったが)。どうにもドラとつながれないとき、彼は天候を思った。

ドラの空白にモディアノが流れ込んでいく。モディアノの空白にドラが流れ込んでいく。だが、空白は埋まらない。不在だ。けれども、空白、不在にこそ人は流れこんでいける。どうしても埋まらない空白、不在にこそ、その人はいるのだ。空白、不在を意識することは、覚えつづけていくことであり、待ちつづけることでもある。

＜彼女がどんな風に日々を過ごしたのか、どこに隠れていたのか、そして、最初に逃亡した冬の数ヶ月、新たに逃げ出した春の数週間、彼女は誰と一緒だったのか、私には永久にわからないだろう。それは彼女の秘密なのだ。哀れな、しかし貴重な秘密であり、死刑執行人も、布告も、いわゆる占領軍当局も、警視庁留置所も、獄舎も、収容所も、歴史も、時間も(私たちを汚し、うち砕くもろもろのすべてのものも)、彼女から奪い去ることのできなかった秘密であろう。＞(本書最終節より)

(震災・まちのアーカイブ会員)

■ パトリック・モディアノ著／白井成雄訳『1941年。パリの尋ね人』作品社、1998年、1800円

【報告】

残し、表現する志

―東京研修のメモから―

寺田 匡宏

私たちは、「まちのアーカイブ(資料館)」を目指している。どうすればこれは可能なのだろうか。その具体的な方法とはどんなかたちがあるのだろう。各地で行われているさまざまな営為を自分の目で見たい。この5月、トヨタ財団の助成を得て、東京を訪れいくつかの施設を見学することができた。その折のメモから抜き書きすることで受け取ったヒントの心覚えとしたい。

昭和の暮らし博物館(東京都大田区)　昭和の暮らし博物館は、昭和初期に建てられた小さな民家を博物館に転用し、「暮らし」をテーマに展示活動を行っている。

ＪＲ京浜東北線蒲田から東急目蒲線で下丸子。下丸子から「昭和の暮らし博物館」へは徒歩約 10 分である。この地域は、昭和初期に開発された住宅地で、雰囲気は、阪急池田付近の住宅地と似ている。緑が多く、生け垣のあるこじんまりした家が並んでいる。

「昭和の暮らし博物館」は木造２階建てのかわいらしい家だった。玄関から入る。博物館というより個人宅を訪問する印象である。まず二階に通される。日当たりのいい６畳間が印象的である。こんなところで勉強したらはかどるだろうと思う。

階下には、台所、居間などがある。座敷ではおじさんが真空管ラジオを修理していた。話を聞いてみると、どうやらボランティアらしい。見学に来た人が、鳴らないラジオを見て、修理してあげようといってまた来てくれたとか。

学芸員の谷口さんに話を聞く。館長の小泉

和子さんの非常勤の教え子とか。また、学習院の小泉さんの教え子の学生もいた。この人には、南馬込の三島由紀夫の家を教えてもらった。

話しているうちに、小泉館長が来られる。家具史の専門家。著書、論文を通じて存じ上げていた。館の運営についていろいろ聞く。常勤スタッフは一人。ほかはボランティアのメンバーが展示を手伝っている。給料、運営費は入館料と、小泉館長による工面とか。小泉館長、若い人の世話をしたり、教えたりするのが好きだという人柄が伝わってくる。

しばらく話して、また家の中を見て回る。いろいろ話を聞きながら。建築主の小泉館長のお父さんが設計技師だったことから、凝った作り。棚などが全て作りつけなど……。

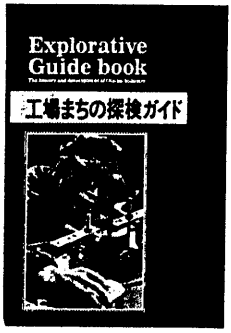
この空間の心地よさは何なのだろう。隅々まで人の手でつくられたというぬくもり。おそらく小泉館長がこの家を残したいと思ったのもそのぬくもりを残したかったからではな

いか。これが手作りの博物館の良さだと思った。また、研究の中心にしようという小泉館長の熱意と人間的魅力も強く印象に残った。

大田区立郷土博物館(東京都大田区)

東京都大田区は、神戸市長田区と同じく「町工場」の多い地域である。昭和の暮らし博物館を出た後、東急で千鳥町へ出て、そこからバスで南馬込の大田区郷土博物館へ。

常設展示のみだったが面白い。1階は考古学。大田区は大森貝塚のあるところ。発見者モースが長く館長を務めていたアメリカのセーラムピボティ博物館と姉妹館になっているらしい。2階は「馬込文士村」。ここに住んだ川端康成、萩原朔太郎、宇野千代などの資料が展示されていた。そして3階は海苔の展示。大森、蒲田周辺は江戸時代から高度成長期まで、海苔の特産地だった。海苔生産に関する民具などがたくさん展示されている。



この博物館では、以前大田区の町工場について特別展を行い話題になった。担当された学芸員の北村敏氏に聞く。さまざまな外部のスタッフとアイディアを出し合いながら企画を進めたこと、実際に町工場から機械を据え付けてもらったことなどを聞く。ここでも人と人のつながりが展示を支えていることに気付く。

その後、大森駅までバスで出て、大森西2丁目から蒲田駅までを歩く。大森は、小関智弘氏の『大森界隈職人往来』(岩波同時代ライブラリー)に描かれた地域。操業時間は終わっていたが、制服姿の工員さんが自転車で家路を急ぐ姿が目立った。

東京都写真美術館　(東京都目黒区)

JR恵比寿駅前の「恵比寿ガーデンプラザ」にある東京写真美術館は、写真に関する先端的な試みが面白いと思っていた。1995年にオープンした日本初の写真専門の美術館である。そこでは、写真による記録や記憶の意味がテーマのひとつとなっている。

特別展「記憶／記録の漂流者たち」を見る。ノミネートされた15名の作品展。興味を引かれた作家が何人か。一人は、「とても雑多な」と題された作品。イギリスのある村に残された写真アーカイブを、現在によみがえらせるというプロジェクト。その匿名性がおもしろい。もう一人は、オランダで都市計画の際、行政から委託されてまちの様子を写真で記録しているプロジェクト。行政が、現状分析をするのに写真家を起用するというところがすごい。文化の違いか。アメリカの大恐慌でも、記録というと、学者による分析とともに写真が重視されていたことを想起する。

現代アートの世界でも、記録や記憶の意味が問われていること。問題関心の同時代性ということを考える。

いささか詰め込み気味の東京行だったが、学んだことは多い。何より感じたのは、記録し、表現する志を持ち続けることの大切さだった。記録し、記憶しつづけること。その志をもつこと。博物館や美術館などかたちは様々である。しかし、表現し、記録するための開かれた場所があること。そのことの意味は大きいと思った。(震災・まちのアーカイブ会員)

【トピック】

震災のコメモレイション

コメモレイション commemoration。記念・顕彰行為。「近年、文化的な生産活動としての記念・顕彰行為の歴史的研究が世界的に注目を集めている。」(阿部安成ほか『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房、1999年)

来年1月17日の震災5周年を控えて、震災のコメモレイションの動きがあわただしくなっています。

兵庫県は、「復興対策国際総合検証会議」を組織し、日本と海外の委員による検証を行うことを発表し、神戸市も同様に、「震災復興総括・検証会議」を組織し、研究者や NPO スタッフをメンバーとして検証作業に取り組むことを計画しています。

一方、震災メモリアルセンターに関する動きも進展しています。(財) 阪神・淡路大震災記念協会は5月、「阪神・淡路大震災メモリアルセンター基本構想」を発表しました。これは、阪神大震災の教訓を伝えるためのセンターの設置計画で、資料収集、調査研究など幅広い内容をもった機関が構想されています。

この計画に関しては、国が神戸市の計画している「震災記念公園」との類似性を指摘し、事業化に難色を示しましたが、その後、県は地元選出の国会議員への説明、全国知事会でのメモリアルセンター構想の国家事業化への要望採択など、実現に向けた環境整備を進めているようです。

マスコミも、例えば『神戸新聞』が「震災からのメッセージ」「震災5年を聞く」という力のこもった連載を開始していますし、テレビ局も来年の1月17日の特別編成の番組(かなり大規模なものになるらしい)のための事前取材にあわただしく動いています。

1月17日に近づくにつれて、この動きは加速されるでしょう。その中で私達はどのような視点を持ち続けることができるのか。記録と記憶にこだわる立場からそれらとどう対峙するのか。私たちの姿勢が問われるのだと思っています。 (T)

1998年度会計報告(1998年3月20日～1999年3月20日)

収入の部		支出の部	
カンパ	186,934	通信費	37,940
助成金	20,000	用紙購入費	48,219
図書販売収入	35,390	事務用品購入費	35,891
雑収入	2,886	コピー費	39,310
		資料購入費	2,000
		研修費	10,400
		雑支出	1,721
		小計	175,481
		次年度繰越金	69,729
計	245,210	計	245,210

1998年度会計報告を致します。

たくさんの会費・カンパをいただき活動を続けることができました。

誌面からではございますが、お礼を申し上げます。

震災・まちのアーカイブ

あの震災はなんであるのか。何度もおもい起こすこと。深く想起すること。

「生者と死者のほとり 阪神大震災・記憶のための試み」

笠原芳光・季村敏夫(編)

生き残った自分 揺れ動いた心

震災手記 教科書に

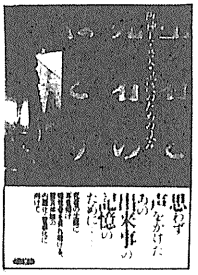
神戸の上念さん執筆

高校国語に来年度から

「戸惑い含め読んで」

阪神大震災をみつめ、思いを手記につづった上念さん＝神戸市内

▲神戸新聞　1999年6月25日(夕刊)



笠原芳光・季村敏夫(編)『生者と死者のほとり――阪神大震災・記憶のための試み』人文書院、1997年、1900円

佐々木幹郎・上念省三・細見和之・野田正彰・宮本佳明氏らによる論考と宮本隆司氏の写真。さまざまな声の場所、「ほとり」から考える。高校国語教科書(筑摩書房)に掲載。

(送料 310 円)

震災・まちのアーカイブで販売中です。購入希望の方は代金と送料を振り込んで下さい

振込先：郵便振替　00920-2-125759　震災・まちのアーカイブ

ある日、むごたらしい出来事があった。人間は受苦的存在というものの、荒涼たるひと撫でだった。エチカということを、あらためて考えた。時の経過にゆだねながら、他者の声をたどってみた。

季村敏夫　新詩集

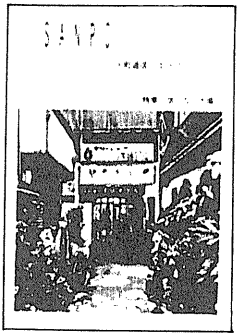
「かむなで」

書肆山田から9月上旬刊行予定　予価 2,000 円

【ブックガイド】

まちを歩く人の本

『下町通信 SANPO』



西宮の写真家永田収氏の発行するミニコミ写真雑誌。現在20号まで刊行。最新号(99年6月)の特集は「阪神西大阪線、気になる市場」。下町を歩くスタイルとまなざしは、東の『谷根千』、西の『SANPO』か。町を歩く、立ち呑み屋に入る。その店おっちゃん、おばちゃんないし客とコミュニケーションする。常連客ばかりの店で思わず遠慮してしまうのも『SANPO』ならではか。

静謐な白黒写真と絶妙な軽みを漂わせた文章でつづられる下町から見た歴史。どういえばよいのか、生活者というのでもないし、『少年H』でもない、歩く速度と立ち呑み屋の視点から見た神戸の歴史が浮かび上がってくる(註・『SANPO』が対象としているのは神戸だけではありませんが……)。そんな歴史はこれまで誰も書いたことがない。

居酒屋といえば、太田和彦氏の『居酒屋大全』(小学館、のち角川文庫)を思い起こすが、ぜひ『SANPO』の連載をもとに、神戸の立ち呑み屋大全を望む。(発行：永田収、1993年～)

『建築MAP　大阪／神戸』

TOTO出版の「建築MAPシリーズ」の大阪神戸編が出た。まちの中にあるレトロなモダン建築から現代建築の最先端までを、すばらしいレイアウトのオールカラーの地図・写真・解説で見せてくれる本である(全436頁。これで1714円は安い！)。

虫眼鏡で写真を眺めつつ、一つのことに心を奪われた。それは、震災後、現代建築としての住宅が阪神間に建ちはじめていること。私たちは、あの日家がつぶれたことにこだわってきた。しかし、そこから出発して、建築家達は新しいかたちの住まいを被災地で作り始めているのだ。そこには一体どのようなメッセージが込められているのだろうか。どんなまちの風景が生み出されているのだろうか。震災精神史探訪の一つの課題を見付けたような気がする。

(ギャラリー間編、TOTO出版、1999年)

(T)

季村敏夫　好評発売中
『エチカ・震災精神史への試み――家族の崩壊、国家の崩壊』　300円
正史ではなく、敗者の沈黙に立脚した歴史。この立場からエチカ(倫理)を問う。(送料140円)

「震災・まちのアーカイブ」活動日誌

(1999年3月～7月)

3月27日(土)　『瓦版なまず』4号発行・発送。

4月1日(木)　トヨタ財団渡辺元氏・坂本香氏来所。同財団よりの助成プログラムについて打ち合わせ。その後、鷹取中学コミュニティルーム、カトリック鷹取教会を案内。

4月3日(土)　年次総会。一年間の総括と、新年度の方針についての話し合い。参加者9名。終了後、ベトナム料理「ラムハノイ」で懇親会。

4月15日(木)　鷹取中学で避難所資料の現地整理。ボランティア団体「ポコアポコ鷹取」の神生善美さん同席。

4月19日(月)　神生善美さんの斡旋で、西神地区の仮設住宅ふれあいセンターより折り畳み机、椅子の寄贈を受ける。神生さんのトラックで運び込み。

5月18日(火)　阪神・淡路コミュニティ基金より、本棚の寄贈を受ける。季村敏夫運転のトラックで同事務所より運び込み。

5月20日(木)　午前、事務所の模様替え。本棚、机を配置換えし、資料の公開施設としての整備に備える。会員菅祥明氏、仏教大学大学院蘇理剛志氏の協力を得る。午後、鷹取中学で避難所資料の現地整理。二氏に加え、あおぞら財団(大阪市西淀川区・公害地域再生センター)職員達脇明子氏も参加。神生善美氏同席。終了後、ベトナム料理「ラムハノイ」で慰労会。

5月21日(金)～22日(土)　寺田匡宏、東京へ研修旅行。昭和の暮らし博物館、大田区立郷土博物館、東京都立写真美術館を訪問。

6月17日(木)　鷹取中学で避難所資料の現地整理。神生善美さん同席。また、この日神生さんの斡旋で外浜仮設ふれあいセンターより長机と椅子の寄贈を受ける。

6月21日(月)　午前、寺田匡宏、阪神・淡路大震災記念協会を訪問。同協会が計画中の「震災メモリアルセンター」構想について、調査第一部長諫山一彦氏、同部主任研究員下村恒雄氏にインタビュー。午後、季村範江・佐々木和子、神戸地裁で「グランドパレス高羽」建て替え決議無効確認請求訴訟の判決を傍聴。

6月24日(木)　トヨタ財団事務局長黒川千万喜氏、渡辺元氏来所。同団体よりの助成プログラムの進捗状況について説明。

6月29日(火)　季村範江、「震災しみん情報室」を訪問。同団体が「震災活動記録室」から引き継いだミニコミ・一次資料の整理、移管について打ち合わせ。

7月5日(月)　午前、一橋大学大学院山本唯人氏(都市社会学)来所。活動の説明。午後、御蔵、新長田を経て鷹取へ。鷹取中学避難所一次資料の現状を案内。夜、森井本店、木馬にて慰労会。

7月10日(土)　季村範江、佐々木和子、震災しみん情報室で同団体所蔵資料を調査。その後、資料の一部について移管をうける。

7月15日(木)　NHK大阪放送局報道部ディレクター村上圭子氏来所。避難所資料についての取材を受ける。来年の1月17日の特別番組ための事前取材とのこと。

今、「震災・まちのアーカイブ」では

■会員募集のお知らせ

「震災・まちのアーカイブ」では会員を募集しております。震災一次資料の保存に関心をお持ちの方、ぜひご参加下さい。資格は特に問いません。活動に知恵と労力を提供して下さる方を会員としています。お気軽に事務所をのぞいてみてください。

また、賛助会員も募集しております。賛助会員には、『瓦版なまず』(季刊予定)、『なまずブックレット』、『阪神大震災 さまざまな声の栞』および研究会の案内をお届けいたします。またアーカイブ所蔵の震災一次資料の閲覧、アーカイブ震災文庫の利用を行うこともできます。年会費は1口 1000 円。1口以上おさめていただいた方は、賛助会員として登録させていただきます。振り込みは、郵便振替　00920-2-125759、「震災・まちのアーカイブ」までお願いします。

●この秋に、震災・まちのアーカイブの事務所を「阪神大震災・記憶のための場所」として公開する作業に取り組んでいます。

●震災一次史料を中心に、図書、ミニコミ、ビデオ、写真など阪神大震災にかかわるさまざまな資料を収集しています。広く公共の役に立てたいと思いますので資料をご寄贈ください。寄託も受け付けています。

●震災資料の整理のお手伝いをして下さる方を募集しています。資料の分類、整理、コピー、封筒詰め、パソコン入力などを行っています。震災資料にご興味のある方、是非ご参加ください。

●鷹取中学校での避難所資料の現地整理も引き続き行っています。月1回程度のペースです。こちらにもご参加ください。

協力して下さった方々 (1999年3月28日～7月10日)

ご協力ありがとうございました。お名前を記して感謝いたします。(敬称略)

■活動助成金　トヨタ財団

■カンパ・会費　阿部安成、江口節、大門正克、瀧克則、筒井耕二、日比野正代、山本唯人

■物品提供　神生善美、阪神・淡路コミュニティ基金、尼崎市立地域研究史料館

■受贈資料　○阪神・淡路コミュニティ基金：図書・パンフレット・チラシ・ビデオほか○尼崎市立地域研究史料館：『地域史研究』『尼崎地域史事典』ほか○永田収：ビデオ『すきなんやこの街が』○小山仁示：『大阪大空襲』『西淀川公害』ほか○阿部安成：『記憶の歴史学』○北村敏『工場まちの探検ガイド』『馬込文士村』ほか

【編集後記】『瓦版なまず』5号をお届けします。季刊になってから2号目ですが、前回が3月の発行でしたので、若干発行が遅くなってしまいました。会員の方々にはご迷惑をおかけしましたこと、おわびいたします◆今号からブックガイドなど新しい試みをはじめました。資料の保存を足場として公共性をどう獲得するか。とりあえずは資料の内容を多くの人に知ってもらうことが必要でしょう。少しずつ試みてゆきたいと思います。　(T)

1999-autumn

6

kawaraban namazu

瓦版なまず　第6号
1999年11月1日発行
編集人：寺田 匡宏
発行人：季村 範江

震災・まちのアーカイブ
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4　神港金属㈱内　Tel;078-681-6231 Fax;078-681-6232 E-mail:kioku@kh.rim.or.jp

【便り】

東京から、次の対話のために

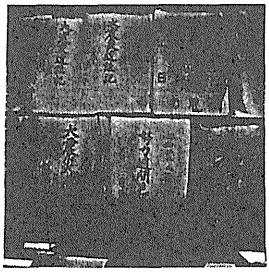
山本 唯人

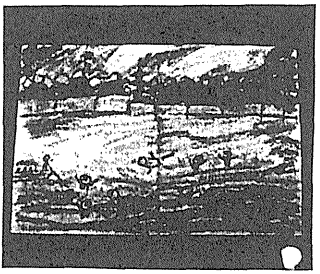
先日は、どうもありがとうございました。はじめて、「アーカイブ」を見せて頂いた上、目下整理中とお聞きしました鷹取中学の資料室にも案内して頂き、とても勉強になりました。空地を縫っていく道すがらの風景に、神戸の「今」をかいま見たような気がします。あの時、ほとんど半日かけて語り合い、それでも、多くを積み残して終った対話をこうして再開できることをとてもうれしく思います。この機会に、東京に暮し、大学院という場所に身を起きながらこの東京という街の過去と現在に思いをめぐらせてきた僕にとって、「神戸」という都市の経験がどういうものか、また、どういうものでありうるのかを考え、少しでも次の対話への足がかりにすることができたらと思います。

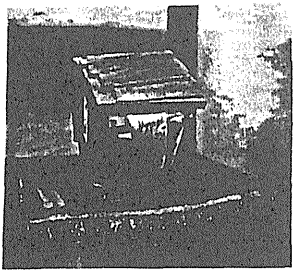
＊

僕が「アーカイブ」のことを知るきっかけは、1998年6月、雑誌『WAVE117』3号に寄せられた寺田匡宏さんの文章「根拠地を持つこと」でした。「震災一次資料の保存」という切り口の新鮮さもさることながら、資料を取り巻く「具体的に顔の見える関係」「人と人のつながり」を尊重し、そこにこそ活動の根拠をおこうとする姿勢が印象的でした。

わたしと「地震」とのそもそもの出会いは、大学3年の時、友人に誘われるまま震災からお







関東大震災当時、小学生による作文・絵画・バラックの模型（東京都復興記念館蔵、撮影・寺田匡宏）

よそ一ヶ月後の神戸を訪れたことにあります。ここで僕は、一週間ほどのいわゆるボランティア体験をするわけです。しかし、僕が「アーカイブ」の活動に強く引きつけられたことには、そうした直接的な神戸体験とは別にもう一つの理由がありました。

それは、その時期、僕の中で次第にかたちをとっていった東京の「歴史」に対する関心です。そのきっかけは、震災救援から帰った翌年、わたしが、大学院へ進むともに始めた東京での「再開発調査」の経験でした。

*

1980 年代、東京では、革新自治体の挫折から鈴木都政へと体制がかわり、折からのバブル経済の波を受けて、急激な都市再開発が進行します。わたしが、大学に入るのがバブル崩壊の年といわれる 1992 年。いわば、「都市再開発」の物理的・精神的傷跡が生々しく残る中で、あらためてその時代を振り返り、この出来事の遺産を検証してみたい、それが当初のわたしの心づもりだったのです。

このとき、対象地として選んだのが墨田区の京島。東京でも有数の町工場地域であり、当時、長田区真野と並んで、「住民参加型まちづくり」の先進地として喧伝された町でした。この墨田区を含む隅田川東岸一帯は、関東大震災、東京空襲のいずれにおいても数万人の死者を出した地域であるとともに、戦前以来の町工場の密集地域であります。そこから、この地区は、戦後、「江東防災計画」と呼ばれる文字通り戦後最大の再開発計画の対象地となり、80 年代、町工場社会の動揺ということが伝えられる中、あらためて、「住民参加」によるまちづくりの実験地として取り上げられたのです。

ここからも伺えるように、この東京という都市の来歴は、震災、そして、戦災という二度にわたる壊滅とそこからの立ち上がりの経験を体に刻みつけたものであるといえます。戦後 40 年を経た「再開発」という事態の中で「まち」について語っていくとき、やはりそこに一つの「はじまり」の物語があるということは印象的でした。それはまた、「どのように再開発を進めるべきか」という枠内で考えてきた自分にとって挫折の経験でもありました。「再開発」の言葉でなく、ここで聞き取った言葉からこのまちの来歴をどう語っていくことができるかということ。また、戦後、このまちをつくってきた人たち自身がそれをどう語ってきたのかということ。それはまだ決着の付かない問いかけとしてある。それを今、どう語れるのか、そこに、この都市の過去と現在を見届けるための重要な何かがある。東京という都市にとって「80 年代」とは、そんな感覚をよびもどす出来事としてあったのだと思います。

*

こんなことを考え、「再開発調査」から「戦災の時代」をどう語るかという方向へ進んだ僕にとって、「まちのアーカイブ」は過去と現在をつなぐ一つの糸に見えました。東京では、今、「都市」という言葉は何重もの外皮をまとわされ、鈍重で、感覚の奥の方に眠らされている。神戸には、僕自身が東京の「再開発調査」やその他の人との交わりの中で出会ってきた「都市の感覚」というべきもの、人の絶え間ない活動に支えられ、また、人に願われたものとしての「都市」があると思える。僕は、神戸に関わる中で、あの「まちがはじまる」という感覚に何度も出会ったような気がしています。ちょっとした寄合い、仕事のあとの飲み会、別れぎわの挨拶、といった振舞いの中で、繰り返し再生されながら。

*

昨年の 9 月 1 日、震災記念日のあと、わたしは、「東京空襲を記録する会」という集りに参加するようになりました。神戸の人たちが、この東京での経験をどのように見ているか知りません。しかし、今、東京が人と人のつながりに支えられた「社会」として再生するために、神戸の経験はかけがいなのないものだと感じています。「東京から、次の対話のために」という願いを込めて、この手紙を終えたいと思います。

(在・東京)

【報告】

資料の公共性について

季村 範江

夏の終わりの昼前、思いがけない人から電話がありました。電話の主は、医師浜畑啓悟氏でした。用件は、氏が所有している震災資料を寄贈したいということでした。

浜畑氏は震災当時、神戸中央市民病院の小児科医師で、避難所や保健所の救急医療に係わっていました。ボランティア活動の資料を収集していた「震災・活動記録室」の代表の友人であり、立ち上げたばかりの「記録室」の活動を支えてくれた一人でもありました。

不意に、私が「記録室」の一員だった四年前の光景を思い出しました。「記録室」の活動について話し合っていたある日のことです。普段は物腰の柔らかな氏が、いつになく厳しい口調できっぱりと言われた言葉です。たとえボランティア活動であっても、いったん助成金をいただき活動を展開している以上、社会に還元されるものでなくてはならないと。いま顧みれば、私が「公共性」ということを初めて意識した瞬間でした。

浜畑氏が持参してくれた資料は、避難所や保健所で救急医療に携わった記録と、NGO連絡会議の外国人救援ネットで活動していた記録でした。まさに自分で歩きまわって情報を書き込んだ地図やメモ。それに報告書。様々な団体が出した冊子など、震災初期の混乱ぶりや人びとの必死な想いが、まざまざと身体に伝わる資料ばかりでした。

短い時間でしたが、浜畑氏は一つ一つの資料を説明してくれました。いつ、どこで、誰が、どんな状況で。話を伺っていると、当時の厳しい状況が浮かんできました。

転勤で神戸を離れても、資料のことが常に氏の頭の片隅にあったそうです。このまま個人で持ち続けるより、しかるべき所に寄贈し、次の災害に役立てて欲しい、そう考え続けていたそうです。そして、震災資料の保存活動が「震災・活動記録室」から「震災・まちのアーカイブ」に移ったことを憶えていてくれ、私どもに声をかけてくれたのです。いつまでも手もとに置いているより資料を役立ててほしい。こう語る浜畑氏からは、資料を託した安堵の表情が伺えました。

思えば氏との再会は、私たちの活動が、人と人との大切なつながりで支えられているということを、改めて教えてくれました。資料は集めるものではなく、ときが熟したら集まるものだとも思いました。私たちの活動は、人びとが暮らすまち（コミュニティー）の中にアーカイブという場をつくることを目指しています。その場が、人と人とが交流する開かれたものであること、そこでときが熟すのを待つことの大切さを再認識させられました。

（震災・まちのアーカイブ会員）

【コラム】　話題の論文、中野敏男「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」（『現代思想』99年5月）を読む。ボランティアを動員（「教育改革」や「新ガイドライン」にもつながる！）ではなく、新しい社会運動としてとらえること。震災の経験から考えることができないだろうか。　(T)

【声】

震災・まちのアーカイブ、資料公開にむけて

前号の『瓦版なまず』でお知らせしたとおり、震災・まちのアーカイブでは、事務所を資料の保存・閲覧スペースとして公開すべく準備を進めている。前回、寺田匡宏の意見を掲載したが、その内容に関して内外からいくつかの声が寄せられた。今回は会員の意見を掲載し、震災資料の保存と公開の意味を考える一助としたい。

震災・まちのアーカイブが資料を公開する、その場所について。資料整理をとおして。

木内 寛子

「内省と祈り」(瓦版なまず5号、寺田匡宏)は、震災・まちのアーカイブが資料を公開するに際して、〈資料閲覧だけでよいのか〉〈ある場所を拠点としてもつとはどのような意味をもつのか〉と問題を提起し、〈私たちが神戸でもとうとしている場所は、どのような場なのだろうか〉と考えをめぐらせている。〈資料閲覧だけでよいのか〉という問いを手がかりに、その場について私なりに考えてみたい。

資料閲覧だけでよいと私は考える。私にとってその場はカラッポ、ガランドウであることにつきる。私たち(震災・まちのアーカイブ)は資料をもとのかたちで保存することを基本にしている。それは、語るのは資料である、できるだけ資料をまわりの空間ごと保存しよう、という考えが流れているからだと私は思っている。資料は私たちの思いを越えてひとりあるきしていく。そこには資料があればよい。ほかはカラッポ、ガランドウ、自由な空間があればよい。いや、資料そのものも、読み手に出会うまではカラッポ、ガランドウだ。私はその場を、考えない、判断を停止する、(資料を人を大切にすることは忘れてはならないと思っているが)、で保っていくことが可能なのではないかと思っている。資料が人が出会ってそれぞれに歩きだす場になったら、いくつもの出会いのひとつになれたら、と思う。

今できることがある、逆に、今はできないことがある。私たちは公開と同時に、集まった資料を次代へ、次次代へと残すためにできることはしていこうとしている。私には見えないけれどもいのちが、無言で資料のあとを押しているように思えてならない。

(1999.8.21)

記憶をはぐくむところとして

藤原 直子

あれは、震災のあった年のこと、被災地で行われた慰霊祭の模様を家のテレビで見ていた。犠牲となった方々に慰霊のことばを贈る代表のひとりとして、小学生の男の子が祭壇に向かった。静かに、語られ始めた少年の言葉は、深い悲しみの中にあって尚、強く生きようとする強い意志があった。私が、その時、感銘を受けたのは、こんなに幼い子でさえ、震災という災いの中で、何かを学び、変わろうとしているという事。そして、決して忘れないという、死者に対する少年の深い思いか

らだった。少年が、この数ヶ月の内に、多くのものを失い、また、多くのものを得てきたのだと察する事ができた。

今、改めてその事を思い返したのは、間もなく私たちが、震災資料、文庫の公開を通し、「阪神大震災・記憶のための場所(仮)」という場を持とうとしているからである。まちの中にある記憶のための場所とは？と思いを巡らすとき、あの被災して間もない頃の少年の言葉が、ふと思い出された。あれから、五年近くの歳月が流れ、街には新しい建物がたち、人々の暮らしも戻りつつある。目に見えて街の姿は変わってきたが、目には見えない、変わらぬものがある。少年が、あの日死者に寄せた決して忘れぬという思いと、震災から学び、変わろうとする志。少年と同じ思いを抱き、格闘し続けてきた人々が、この地には、たくさんいたことだろう。

私たちの開こうとしている記憶のための場所が、復興という名のもとに、変わり続ける街の中で、こんな人々の変わらぬ思いと格闘が、決して消されることのないように、残され、伝えられる場であればと思う。そして、公開される資料を道標に、人々が出会い、語り、もの思うところとなればとも。記憶をつなぐことは、命をつなぐこと、そう思っている。

資料を集中的に収集するのではなく、まちの中にアーカイブをつくること、そのことを通じて、ひとりひとりが震災に向き合うとはどういうことかを考える。私たちが基本としている震災一次資料へのスタンスからすると、震災・まちのアーカイブが、資料の保存・閲覧スペースを持つことは、矛盾しているかにみえる。けれども、私たちが求めているのは、資料の収集倉庫ではないし、情報センターでもない。そういうものではない、出会いの場は可能か。資料と人との出会い、人と人の出会い。こういう言葉が寄せられた。「ゆるやかな、小さな言葉のざわめく空間」。そのような空間をどう表現すればよいのだろう。資料の発する小さな声や人々の心の中のささやかなつぶやき、それらにこころをよりそわせる。今後の作業の中で、少しでも深めたいと思う。

(寺田 匡宏)

民間アーカイブの系譜⑤

史料の運命

史料というモノにも運命がある。歴史学者・網野善彦氏の『古文書返却の旅』が出版されたが(中公新書、1999 年 10 月)、それを読みながら、地震直後の記憶がよみがえった。まだまちが騒然とした空気に包まれていた4月、芦屋市津知町の、倒壊したあるお宅でパワーショベルの下をくぐってガレキの中を古文書を探していた風景。

その資料は、小山家文書という。敗戦後、水産庁が、漁業制度改革の資料として全国各地の古文書を借用・収集する文書館を計画し、巨額の予算と人員を費やして、百万点を超す古文書が全国から東京に集められた。しかし、予算は 5 年でうち切り。収集された文書は、そのまま返却もされず、資料館に引き取られることもなく、倉庫の中にリンゴ箱に入れられたまま山積みされることになった。その計画に加わっていたのが若き日の網野氏であり、その時集められた文書の一つが、小山家文書である。

借用し放しになった文書を返すため、名古屋大学の職を辞して、全国の所蔵者をたずねる、というのが「古文書返却の旅」であり、小山家文書も網野氏の手によって返却された。小山家文書は、南北朝期の紀州の水軍としての活動を伝える中世文書だが、網野氏は所在のわからなくなっていた所蔵者小山氏を捜し出し、34 年ぶりに文書を返却、そして新たな交流を結んだ。

地震の際、網野氏はいち早く関西の歴史研究者に、芦屋市の小山家の状況を訊ね、その情報を受けた歴史学徒のボランティアが瓦礫の中を這い回った。

結局、瓦礫の中を探し回ったが、小山家文書は見つからなかった。一緒に保存されていた甲冑もろとも消えていたのである。しかし、小山家文書はガレキとなってこの世から消えたのだろうか。いや、どこかに眠っているはずだと思う。いつそれが姿を現すのか――。もしそれが姿を現したときには、ガレキの中を探し回った一人として、史料にその運命を問いかけてみたいと思う。

(寺田匡宏)

かったが、新京（満州の首都）からクチン（インドネシア）まで従軍したという。休みの日など将校などは別にして、兵隊は位の高いものから順に列をつくり樹木の影の慰安所に通ったものだ。休みが楽しみでなあ。たぶんお前の親父もおんなじや。

その人の、この言葉は、今でも昨日のことのように想い出せる。父とその人は戦後になり知りあっているから、中国大陸で時間を共有することはありえなった。にもかかわらず慰安所への行列にまじる父の姿を、私は心に描いてみた。「皇軍の兵士」にとってはつかのまの快楽だが、煎餅蒲団にうずくまる女性にとっては、果てしない苦痛でしかなかった。男により「醜い業」と命名された業につく女性たち。明治維新以降、日本は戦争の明け暮れであった。ことを、戦争という非日常への想像力が稀薄な現在からとらえるべきではないという声もしきりに聞こえてくる。「戦争は悲惨ばかりではない」という声も。先程自裁した江藤淳氏は、「戦争自体の現れは物理的に酷いものでしょうけれども、その醜いものにあえて崇高なものを託す」と激しく静かにつぶやいていた。

映画「ナヌムの家」を想い起す。

中国辺境で、忘れかかった母国朝鮮語。しかしいまだ身体で憶えている日本語「兵隊さん」。故国を遠く離れ、辺境で置き去りになった少数の人びとは、いまだ戦争が続いている。彼女たちをそのような場所に追いたてたものは何なのか。いまなお元に戻れないことこそ、戦争が継続していることの証しである。辺境でうち沈む彼女たちの悲しみ。だが彼女たちの沈黙を跨ぎ越すようにして正史が成立する。

時間の経過とともに、何とか忘れられる悲しみ。一方どうしても忘れられない悲しみ。悲しみは内面に塗りこめられ、沈黙の殻が表層を覆う。そうして細部はうずく。細部は存在を主張し、うずき続ける。

ふと「ナヌムの家」の姜さんの苦悩を思う。私には、ふと、という行為しか選択できない。私は一言も発することができない。しかしそこが言葉の始まる場所なのだ。

「牛乳はイヤだ。兵隊の精液を思い出すから」。同じ男として、おのれまた小暗い性欲を有することに、この夏、私はおぞましさをおぼえていた。

（震災・まちのアーカイブ会員）

震災資料整理への参加を募っています

●別掲記事でもお知らせしましたが、この秋、震災・まちのアーカイブの事務所を、震災一次資料やその他の資料の保存・閲覧スペースとして公開する作業を進めています。

●震災一次史料を中心に、図書、ミニコミ、ビデオ、写真など阪神大震災にかかわるさまざまな資料があつまっています。震災資料の整理のお手伝いをして下さる方を募集しています。資料の分類、整理、コピー、封筒詰め、パソコン入力などを行っています。震災資料にご興味のある方、是非ご参加ください。

●継続中の鷹取中学校での避難所資料の現地整理をはじめ、各地に残されている震災一次資料の所在調査のフィールドワークも平行して行う予定です。こちらにもご参加ください。

【論】

夏に思ったこと

季村 敏夫

この夏読書をしていたら、見過ごすことのできない文章に出会い、思わず立ち止まってしまった。

何とアントン・チェホフがシベリヤ旅行中、日本の娼婦と性的交渉をもっていたというのだ。書簡集の中で、本人自らしたためているらしい。だが最新のチェホフ全集（中央公論社版）からは、なぜか削除されている。

このことを私は樋口覚氏の著書『昭和詩の発生』（平成二年、思潮社刊）で知った。この本はかつて確かに読んだはずなのに、いったいどこをどう読んでいたのか。なお樋口氏は、他にも夏目漱石『満韓ところどころ』（明治四二年刊。満鉄総裁中村是公の紹介による旅行。修善寺での大喀血前のことである。）の中に出ている「露助」や「チャン」などの差別表現に関し鋭い指摘をしている。

当時相当数の日本人女性が、外地シベリヤ、満州などへ「醜業婦」として向かったという。しかし「醜業婦」とは何と厭な言葉か。江戸期、「悪所」と呼ばれた場所に居た女性は独特な地位を与えられていたはずだ。「醜業婦」なる言葉が成立した過程を、いま私はつまびらかにできないが、おぞましい思いにふるえる。（上野千鶴子氏の労作『ナショナリズムとジェンダー』の中に、どうして日本人女性からの証言がないのか、なぜゆえ彼女らは沈黙を守るのかに関する言及がある。）

旅の一日、女性とそのような性的関係を結んだからといって、チェホフ評価に変更が加わるということはあろうはずもない。しかし、しかしである。当時の日本の文人が書いたものを繙けば、「放歌高吟、酩酊し友と妓楼で散財」なぞという外地での戯れの光景がたちどころ目に飛びこんでくる。「淫らな声に満ちた、狭い、汚い町」を綴ったあのローマ字日記。妻節子がいるにも拘らず、ミツ、マサ、キヨ、ミネ、ツユ、ハナ、アキ、夜毎「淫売婦」の身体にしがみつき、束の間の快楽を貪った啄木。金銭で「醜業婦」を買い続けた永井荷風。二葉亭四迷や幸徳秋水らは、南進するロシアの脅威に備えるため、日本人「醜業婦」を大量にシベリアに送り込み、ロシア人と婚姻することにより、日本精神の土着化を本気で考えていた。更に秋水の師中江兆民は、ウラジオストックで「女郎屋」の経営を模索していたらしい。（桶谷秀昭著『二葉亭四迷と明治日本』参照）

戦争と性欲。男子は兵隊、女子は「慰安婦」。何と歪んだ人間観か。世界の地域紛争で今なお絶えないレイプを思えば、うずきは深まる。チェホフのこの個所はきわめて象徴的ですらある。避け難い、仕方のない細部なのだろうか。そうではあるまいと現在は断言する。

若年の頃「兵隊やくざ」（監督増村保造。増村保造は東京大学法科卒で同期に三島由紀夫がいた）という映画を観た。テーマのほとんどは中国大陸での戦争であった。いかにも日本の庶民といった感じの肉体派勝新太郎。戦争に批判的なインテリという田村正廣。娼婦、ゲリラ、諜報員などがモノクロのなかで描かれていた。（苦力や朝鮮半島出身の「慰安婦」はただの一度も出ていなかったと記憶する。）映画は必ずといっていいくらい娼婦（なぜだか日本人）と日本兵の性的交渉が描かれていた。

平成になった頃、父の十七回忌が無事終わった。ようやく遠慮なしに語りあえるようになった父の古い友人に、ある日思い切ってたずねるということがあった。「慰安婦」に関してである。彼もまた前線ではな

「震災・まちのアーカイブ」活動日誌

(1999年7月～10月)

7月18日(日)　『瓦版なまず』5号発行・発送。

8月13日(金)　住民図書館(東京)の矢澤直子氏来所。民間の資料保存機関によるネットワークに関して話し合い。その後、鷹取中学、下中島仮設、カトリック鷹取教会を案内。

8月26日(木)　季村範江、佐々木和子が「震災しみん情報室」の実吉威氏、八十庸子氏と、「震災・活動記録室」が収集した資料の今後の保存体制について話し合う。

9月6日(月)　季村範江、佐々木和子、寺田匡宏が「震災しみん情報室」の実吉氏、八十氏と、「震災活動記録室」が収集した資料の今後の保存体制について話し合う。

9月14日(火)　季村範江、佐々木和子、寺田匡宏が「震災しみん情報室」の実吉氏、八十氏と、「震災活動記録室」収集の資料の保存体制について話し合う。

9月18日(土)　佐々木和子、寺田匡宏が、東京明治大学で開催の、歴史学研究会総合部会・例会「震災と歴史学」に参加。なお、両名はそれに先立ち関東大震災慰霊堂・東京都復興記念館も見学。

9月25日(土)　「震災しみん情報室」から「震災・活動記録室」収集資料の一部の移管を受ける。

10月8日(金)　季村範江・季村敏夫、震災記録を残すライブラリアンネットワーク主催の「第7回 震災記録情報交流会」に参加。

今、「震災・まちのアーカイブ」では　会員募集のお知らせ

「震災・まちのアーカイブ」では会員を募集しております。震災一次資料の保存に関心をお持ちの方、ぜひご参加下さい。資格は特に問いません。活動に知恵と労力を提供して下さる方を会員としています。お気軽に事務所をのぞいてみてください。

また、賛助会員も募集しております。賛助会員には、『瓦版なまず』(季刊予定)、『なまずブックレット』、『阪神大震災 さまざまな声の栞』および研究会の案内をお届けいたします。またアーカイブ所蔵の震災一次資料の閲覧、アーカイブ震災文庫の利用を行うこともできます。年会費は1口 1000円。1口以上おさめていただいた方は、賛助会員として登録させていただきます。振り込みは、郵便振替　00920-2-125759、「震災・まちのアーカイブ」までお願いします。

協力して下さった方々　(1999年7月～10月)

ご協力ありがとうございました。お名前を記して感謝いたします。(敬称略)

■活動助成金　トヨタ財団　■カンパ・会費　井上朗　Y・S(匿名)

【編集後記】『瓦版なまず』6号をお届けします。前号の発行は7月18日。今号で、前号の遅れを取り戻そうとしたが、結局3ヶ月後に。原稿は、夏の終わり頃から集まっていたが……。◆もうすぐ震災から5年。今年の5年目はどうなるのだろうか。(寺)